

芥川だより

発行日***2017年4月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL072-681-8870

梵

***** 一部100円です *****



松茸山の入札

田植えも終わり農家が一息つくころ、各戸が煮しめやサバ寿司などを作って村の集会所に集まる。親父が仕事で寄り合いに出られない時は母か私が出る。いつもの寄り合いは子供の私には無理なので母が出るのだが、松茸山の入札が行われる寄り合いの時は、母が私を行かせた。母は「みんなが入札価格をはやしたててつり上げてやから、つられたらあかんで。安い値段やったら落としてもよいけど、高かったらやめときや」と念を押される。

村の松茸山は塩出の山とアンノクのある。この二つの松茸山に我が家の松茸山が二ヶ所とも隣接していたので入札には関心が強かった。家の松茸山を見に行つたついでに見たらいいだけだから安い価格ならできれば落札したいわけである。入札は宴たけなわになった時から始まる。酒の勢いで落札価格を吊り上げる魂胆だ。18戸の村で松茸山を持っている家は5軒ほどで少ない。松茸を採りなれていないと採りにくいのだが、面白半分て参加する人もいるから油断ならない。紙に入札価格を書き最高価格を書いた人の価格を司会が読み上げて決まる。まずは一番のアンノクから始まる。去年の入札価格を互いに言い合いしながら、天気具合を考慮して価格を書く。私は、1万2千円と書いた。去年は1万8千円だったが、出来るだけ安く落としたいからである。開票された結果は2万円で負けた。次の塩出も1万円差で負けた。昨年よりもだいぶ高くなってしまった。出るか出ないかわからない松茸であるが、博打的な面白さがあるからみんなの関心も高い。

家に帰り母に結果をいうと、「えっ、高いなあ、よう元取ってないわ」とそっけない。しかし、母はたくましかった。それから数年後、入札の時は近所の親しい初美さんと連合を組んで幾度も落札するようになった。二人とも同じところにマツタケ山を持っていたからである。婆さんたちにはいい小遣い稼ぎになったのだろう。年老いた婆さんにはきつい急な山道を登らなければたり着けない松茸山だが二人にとってはワクワクするようなひと時であったに違いない。幾つになっても松茸採りほど面白い仕事はないからである。

死をめぐるあれやこれ (31)

石川 吾郎

擬傷

私の通った高校と私の実家はともに川（長良川）のほとりにあったので、徒歩通学をしていた私は学枝がひけると、ときどき川原を歩いて帰ることがあった。

中流の河川は、丸い石がごろごろして歩いて歩きにくい。しかし遠くに雪をかぶった伊吹山の姿や奥美濃の山並みが連なり、遮るものがない青空が広がっていて、気持ちがいい。その青空にはヒバリが空中で止まって、ずっとさえずっている。ときには平たい小石を探して、水切りをしたりしてみる。

そんな川原を歩いていると、目の前の地面でハトよりは小型の鳥がパタパタと翼を必死に動かして少しずつ遠ざかって、必死に逃げようとしている。

ははあ、これがどこかの本で読んだコチドリ「擬傷」行動なんだと気が付いた。確かにコチドリの行動は迫真の演技だ。翼が傷ついてもがいているように見える。さては、と周りを見渡してコチドリの巣を探してみるが、よくわからない。しかたがないので演技を続ける親コチドリのあとについて二十メートルほど行くと、親鳥は苦しそうだつたのがウソのように元気に素早く飛んでいってしまったのだ。後で調べてみると、コチドリは川原に直接、小石に似た色目の卵を産むそうだ。どうりで巢らしいものがなかったわけだ。命がけの親鳥の行動には、本能とはいいながら感動したことだ。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
森友・共謀罪・遺伝子組交換など	伊藤明	2
素老人☆よもだ帳	坂本一光	6
「付度」を折り返す	祖蔵哲	8
大峰奥駈道	梵店主	9
おっちょこちょいぼけ	A O	10
孫ウオッチング	福田圭	11
大人の今昔物語	石川吾郎	12
B級サラリーマン渡世譚	明石幸次郎	13
オクラの山たより	困丁生	14
我が奥の細道	成瀬和之	17
米国紀行	河原林成行	18
一八六七年	大江雉鬼	22
編集後記	嘉	23
女90年の軌跡	眞糺	24
俳句	土田裕 影山武司	24

◆はじめに

森友・共謀罪・遺伝子組み換えなど

伊藤 明

森友学園の問題については、この一ヶ月間に実にいろいろなことがあり、先月のこの記事に書いたことは、旧聞に属するようになってしまいました。籠池氏の証人喚問で、昭恵夫人付きの公務員の方からのファックスなどの新しい証拠が出

てきて、昭恵夫人の口利きによる関与が決定的に疑われる状況になってきています。とは言え一旦盛り上がった世論は、マスコミが安倍応援の悪質な評論家を出して意図的に論点をそらしているからか沈静してしまっただけに見えます。しかし「国有地が八億円以上も値引きされ、首相と関係の近い学校法人にただ同額の価格で売り飛ばされた」その経緯と責任追及は、まだ全くなされぬままです。これは主には、安倍政権が「とかげのしっぽ切り」に努めており、マスコミ（特に産経、読売、NHKをはじめとする）が、この問題の「論点ははずし」、些末な問題へと押し込めようとするキャンペーンを張っていることによるものがよくわかります。

関与の疑いが濃厚な安倍昭恵夫人、森友学園の籠池氏に、国有地を値引きすると決定した時の財務省理財局長だった迫田英典氏と、近畿財務局長だった武内良樹氏、それに安倍政権の推進役・今井尚哉首相秘書官（この今井という人物は、安倍政権の多くの政策を主導的に立案している人物だということ）を証人喚問する必要があります。二人の官僚は国会に参考人招致され、政治家の介入を否定して、知らぬ・存ぜぬで通してしまっています。参考人の立場では、偽称・ウソを言っても追及されず、偽証罪に問われることもないので、意味がありません。さらにまた松井大阪知事も証人喚問が必要で、この問題に深く「維新」が関わって、森友学園が学校用地を取得するために、そのハードルをわざわざ低くした

ことが、明らかになっていきます。また「**経済特区**」という制度を作りだし、安倍氏が自分の親しいオトモダチに利益を与えるという構造を作り出していることが明らかになって来ました。これが**加計学園の問題**で、これは加計学園ばかりではなく他の学校法人にも当てはまるということです。

賭博を公認したIRなどに見るように、外資の参入の障壁を低くして、日本の国民から搾り取ろうとするグローバル企業を呼び込む目的で作られたといっている「経済特区」。これには、首相自らの私的な利益供与の疑いが濃厚です。

この森友学園問題と加計学園を追求して、日本政治の権力を握って、横暴を極めた観のある安倍政権を倒すことが是非必要です。今回は安倍政権の下で、この日本という国が、あらゆる面から、害虫に食い荒らされるように荒廃させられているという事実をみていきたいと思えます。

◆共謀罪は怖い！

四月六日から、「共謀罪」（テロ等準備罪）と言っている）の国家審議が開始されました。与党は三十時間の審議を予定していると言っているようですが、このような重大な法案を二十時間足らずの審議（その半分以上の時間は、与党議員の時間つぶし質問でつぶされてしまいます）で、実質の審議時間は半分以下になり、言論表現の自由を抑圧し、日本を監視社会にしてしまうような内容です。まさに「平成の治安維持法」と言えるも

のです。

戦前の「治安維持法」は、一九二五年成立してしばらくは、あまり適用されることはなかったものの、一九四一年に死刑導入などの厳罰化が行われ、戦前日本の嵐のような弾圧拷問の密告社会を出現させた最大の根拠になっていっています。このような事情から「時限爆弾」と表現されることもあります。

今回の「共謀罪」もこのような経過をとることになりかねない危惧が大いにあります。

「テロ対策」と言いながら、処罰対象となる「準備行為」は拡大解釈が可能で、実際に判断するのは捜査機関となる危険性が極めて高い。「共謀しているか」どうかをつかむために、一般人が盗聴や監視の対象になりかねないものです。

「共謀罪」の問題点を一覧にしたものが「東京新聞」で掲載されていましたので多少改変して、次に掲げてみます。

●「心の中」の処罰（違憲の恐れ）

- ・計画段階の捜査で人権侵害の恐れ…市民の監視、萎縮につながる。合意した時点で逮捕、家宅搜索されるのか。通信傍受など捜査手法の拡大、刑事法の原則を覆す。

- ・何が「合意」に当たるのか…「合意」の範囲の不明確さ。目くばせでも。後からの合意でも成立。誰か一人が準備行為をすれば処罰。ライン・メール・電話連絡でも合意が成立。

- ・何が「準備行為」に当たるのか…ライン・メール・電話連絡は準備行為とされ

ること。客観的に総統の危険性が認められない準備行為で強制捜査できるのか。

● 一般人の処罰

・何が「組織的犯罪集団」に当たるのか…判断をするのは捜査機関。性質の変化はいつどのように判断するか。反復継続がなければ認定されないのか。

・えん罪、事実誤認逮捕の恐れ…司法取引による巻き込まれの懸念。第三者供述による身に覚えのないえん罪。捜査機関に不利な証言で逮捕もあるか。

● 「テロ対策」なのか

・なぜ対象犯罪が二七七なのか…どれが「テロの実行」なのか。個別犯罪の必要性の説明は。

・テロを防止できるか…現行法で対応可能ではないのか。

・国際組織犯罪防止条約はテロを対象にしているのか…条約の目的は何か。「共謀罪」法案の目的は何か。「テロ」の定義とは。法案の中にはテロのための条文は一条も存在していない。

・共謀罪なしで条約締結できないのか…共謀罪か参加罪のどちらかをつくらなければならぬのか。

● 「無限定」という恐怖

・適用対象に限定がないことが問題。「組織的犯罪集団」には認定や指定が不要なのはもろろんのこと、過去に違法行為をなしたことや、過去に継続して存在していたことすらも必要ない。当然、それ以外の集団との線引きが事前になされていくわけではなく、構成員の属性も限定されていない。

● 表現の自由はどうなってしまうのか
・ 一般人が対象になるということでは、社会運動への悪影響も危惧されます。より一層広がりのある問題は、各種団体も批判するとおり、表現の自由全般に対する抑圧です。

◆ 今の教育、おかしいんどこが？ 教育勅語とが

安倍首相・菅官房長官・稲田防衛大臣をはじめとする、日本会議のメンバーである安倍政権のメンバーたちが、戦前の明治憲法下の体制に回帰しようとする意図をもっていることは、予てから有名でした。

森友学園の問題で、この「教育勅語」を幼稚園児たちに暗記をさせ、それを聴いて安倍夫人が感動して涙を流したと言ふことも伝えられています。

そして三月三十一日、安倍内閣は「教育勅語は憲法や教育基本法に反しないような形で教材として用いることまでは否定されることではない」との閣議決定を行いました。

日本共産党の小池晃書記局長はこれに對して「異常な閣議決定だ」と厳しく批判しました。小池氏は、答弁書が「憲法や教育基本法に反しないような形で」教材に用いるのは否定されないとしていることに、「そもそも教育勅語は憲法」と当時の教育基本法に反するから、一九四八年に衆参両院で排除・失効確認の決議が上があった」と指摘。「勅語の中にはいい部分もある」との見方に対して、『ひと

たびことが起これば、天皇のために命をささげるべし』ということが勅語の核心であり、『親孝行』など十二の『徳目』は全部そこに向かっている」と強調しました。小池氏は、今回の閣議決定が秘密保護法や安保法制＝戦争法、「共謀罪」と同一線上のものだとし、『戦争する国』に向かって暴走する安倍政権の危険な姿勢があらわれている、と語っています。まさに正しい指摘です。

なお八三年には、当時の中曽根内閣は「教育勅語」を否定し、是正勧告を出していたという実績があります。

◆ 銃剣術を中学体育で取り入れるってなに？

道徳を教科にして、教科書検定でパン屋を和菓子屋に変えさせた文科省ですが、銃剣術を中学校に取り入れることにしました。

旧日本軍の銃剣術を競技にした、木銃で「喉と心臓を突く」というのが銃剣道です。これを中学体育の義務教育に取り入れると文科省が発表しています。これに對して元自衛隊員は「自衛隊の中で銃剣術を職業軍人として教育される。銃剣術は心臓を突く人殺しの術です。相手の心臓の部分の突くと一本となるもの」と語っています。子供たちに戦争の場での殺人術を教える、ということなのです。

◆ 安倍内閣は保守なの？ 一体何者なの？

安倍首相の恩師である、成蹊大学の元学長で国際政治学者の故宇野重昭氏が生前涙ながらに「安倍くんは間違っている」

「勉強していない」「もっとまともな保守に」と批判していたということなのです。「彼は首相として、ここ二三年に大変なことをしてしまっただけです。平和国家としての日本のありようを変え、危険な道に引つ張り込んでしまった」現行憲法は国際社会でも最も優れた思想を先取りした面もある。彼はそうしたことが分かっていない。もっと勉強してもらいたいと思います」「彼の保守主義は本当の保守主義ではない」と指摘していたといえます。

実際のところ、**安倍政権はけつして保守ではありません。**保守ならば、現状を原則保持して、徐々に少しずつ変化をしていくという方法をとるものです。安倍政権はそうではありません。以前安倍氏は「戦後レジーム（政治体制）からの脱却」というフレーズを頻繁に使っていましたが、最近になってこの言葉が何を意味しているのかがかなり明確になってきたと思えます。

安倍政権を適切に表す言葉があるとすれば「**極右急進政権**」というのが、あてはまるのではないのでしょうか。「戦後レジーム」つまり「日本国憲法」を急速に破壊して、その支配を脱却しようとしている。実際にニューヨークタイムズをはじめ**海外メディアは安倍政権を「極右政権」と表現しているものはいくつもあります。**

では、その先にあるのは一体なにでしょう。それを鮮やかに表現しているのが「**日本会議**」ということになるでしょう。現在、安倍・麻生・菅・稲田をはじめ、大部分の閣僚や多くの与党議員が所

属しているという団体です。この日本会議は、戦前日本の天皇中心の、明治憲法下の日本に帰属させることを目標にしている団体です。この視点からみると、安倍政権の政策やふるまいをほぼ説明がつくように思えます。

◆安倍政権がやってきた「ト、やろつ」としての「ト、やろつ」何？

以下に、安倍政権のやってきたこと、やっていることを、簡単にまとめてみましょう。主な柱として、

★この日本会議の目標を実現すること。つまり明治憲法下の戦前日本へ帰属させること。

★米国盲従の姿勢。

★日本の富、日本国民のもつ富を、米国のグローバル企業へと流していく。在来日本の制度を破壊して、そのための仕組みを「規制改革」と称して次々と作っていく（TPPはそのための包括的全面的な仕組み作りでしたが、それはいったん頓挫しています。しかしこれは放棄されたわけではありません。こういった主要な特徴があるように見えます。

さらにみていくと、現実的な方法としては、

●**人事を通じて、三権を支配する。**…三権分立の原則を破り人事権を通じて、立法・司法を支配してしまっている。司法に対しては最高裁判官の指名と最高裁判官以外の裁判官を任命。この結果、裁判所人事はほぼ完璧に上意下達の管理体制が確立され、政府の意向に逆らうことが困難になってしまっています。

また立法に対しては、小選挙区制の下で、自民党公認を得る必要があり、与党内で政権に対立することができない状況がある（これは従来反主流派が存在した自民党の中でそのような存在がゆるされなくなっている）。

●平和憲法を破壊し、また改変を目指して、**日本を戦争ができる国へと変えていく。**

戦争が可能になることによって、武器生産などの戦争関連の大企業を儲けさせる仕組みを作る。

●**言論の自由を制限して、批判をさせない。** 恫喝を掛けてマスコミを萎縮させる（「政治的中立」を名目として、マスコミの政府批判を押さえ込む）

●「教育勅語容認の閣議決議」にみるように、**教育を戦前なみの皇国教育にしようとしている。** また公権力が家庭内の教育に介入することを定める「家庭教育支援法」を成立させようとしています。

●森友学園問題でもあきらかなように、官僚の体系を支配してしまっている。そもそも官僚は「公僕」であって国民に奉仕する存在であるはずが、ウソを平然とつく。また重要資料を「廃棄」したとする（実際には廃棄はあり得ないものも官僚たちは平気でウソをついているとみられます）。

●主に米国のグローバル企業を日本に進出させて、儲けさせる。つまり日本の国民から利益を吸い上げさせる。「規制改革・自由化」と称して、国民の生活と健康を守ってきたわが国の基本的な仕組みを破壊していく。これには「**戦略特区**」

が利用される。医療・保健制度、農業、インフラ事業など、国家として基本の根幹分野が含まれています。

●国民の生活の向上などは考えない。貧困・格差・子育て・教育費問題などに、まともに取り組まない。

●**原発推進**…事故から六年以上経過しても、解決のめども立たない原発をさらに推進しようとする。海外に原発を輸出しようとする。除洗事業などで利権を作り出す。また情報を隠蔽して、都合のわるい放射能汚染の実態を隠す、また放射能と関連性の強いと考えられる小児甲状腺ガンなどの正確な統計を隠す。

●不都合な情報を隠蔽してしまう…とりわけ、国会の議事録までもが政権に都合の悪い内容が消されてしまっているのです。安倍首相が「私か妻が関係していたら国会議員を辞職する」と断言した発言などが、国会のホームページの「国会議事録」から消されて読むことができない状態になっていのです。（これは四月十日現在では、読めるようになった）

●**米国の政権への盲従**…沖縄の辺野古基地建設を、地元の強い反対にもかかわらず、強行する。これには米国側の強い指示があるものと見られています。またトランプ政権へ移行して、トランプの元へはせ参じて、トランプ政権の姿勢もまだ見当がつかない段階から、服従姿勢を示す。最近のシリアへの爆撃もすぐに「支持」の表明する。

●海外への**バラマキ外交**…頻繁に外遊を重ねる安倍氏ですが、発展途上国に対し

すでに十兆円以上のぼろ金をばらまいています。これらはむろん税金で、見返りとしてはせいぜい大企業がインフラなどで稼ぐことができることができるかもしれない程度の効果しかない。一方国内では、福祉・教育・育児・介護分野など緊急に資金投入が必要な分野が山積をしているにもかかわらずです。福祉分野には、常に消費税増税しか財源がない、と声高に叫んでいるのに、海外にはこれだけの、大金をばらまいているのが安倍政権の実態です。

●**税制、とりわけ消費税増税**…これは中止したのでなく単に延期をしただけの状態です（来年の十月には10%への増税の予定）。それも安売法と引き替えたようなものです。また消費税の裏では、**必ず同規模の法人税の減税**を行ってきています。その結果、消費税増税で国民から吸い上げた消費税は、大企業のみどころにそのまま入ることになっているのです。

さらに輸出企業には「**輸出戻し税**」という補助金制度があり、輸出大企業は、消費税分だけの補助金が、濡れ手に粟の状態が入ってくる。これは消費税が増税になれば、自動的に増額されることになります。トヨタなど自動車輸出企業は、まさにこの制度の恩恵に預かって、一時は法人税がゼロであった期間もあるくらいなのです。さらに、このことから経団連などの経済団体は、国民の購買力が落ちてデフレになることが分かっていますが、消費税増税を主張しつづける原因なのです。

こうして見てくると**安倍政権は、反国**

民的であり、親大企業であること、がわかります。「反国民的」であるとは、国民の大多数の生活を貶め、向上を阻害する姿勢といえます。このような政権は今すぐにも、止めさせる必要があります。この国を破壊する政治は、一刻も早く止めなければ、われわれ国民の生命と生活は、いよいよ悲惨な状態に追い込まれていってしまうのです。

◆ 遺伝子組み換えの作物が日本に入ってくるのってほんまに

今回、以下の後半では、マスコミがほとんど報道しない重要問題を取りあげます。それは「主要農作物種子法」の廃止ということですが。

森友学園の籠池氏が国会で証人喚問をされた三月二三日の同時刻に「主要作物種子法」の廃止が衆議院で可決されました。このことを日本のマスコミはほとんど報道していません。しかしこの事態は、今後の日本の農業・食糧問題について、非常に重要な意味をもっているのです。この種子法の廃止ということがどんな意味をもっているのか。これには米国の遺伝子組み換えの巨大企業モンサントがからんでいるといえます。

このモンサントという会社は、ベトナム戦争で使用された枯れ葉剤の製造で有名な会社です。実は「ラウンドアップ」という強力な除草剤を製造しており、この除草剤はすでに日本で販売されています。モンサントは、このラウンドアップが撒かれても、枯れない遺伝子を組み込ん

だ大豆など作物、遺伝子組み換え種子を販売している、この特許を取得しています。

モンサントの商売は、この種子とラウンドアップを組み合わせて販売することで、莫大な利益を上げているのです。米国の農家では一年に数回ラウンドアップをまけば、除草が要らずに収穫できる、という状況になっているといえます。

ただこの収穫した種子を翌年にまいて栽培をしようとすると、モンサントは「種子警察」と呼ばれる見回りをして、前年の種子を栽培していることが発覚すれば訴訟を起こす、という手法で取り締まりを行っているのです。ですから農家はモンサントから、毎年新しい種子を買わなければならないのです。そしてラウンドアップも同時に購入するということになるのです。モンサントはこのようなビジネスを展開しているのです。

世界ではすでに、ブラジルやメキシコで、このようにしてモンサントに種子を握られているといえます。これは遺伝子組み換え種子の安全性、日本の自然環境に与える深刻な影響、さらには食糧生産を外国の一会社に支配させられてしまうことの危険性という食糧自給・食糧安全保障上で、国として重大な問題なのです。

日本ではこれまで「主要作物種子法」によって、遺伝子組み換え作物を基本的に厳しく取り締まってきました。また行政が責任をもつて種子を管理しているのです。

しかしこれらの仕組みを放棄してすべて民間まかせにしてしまい、日本の食糧生産にモンサントの支配を許してしまお

うとするのが、今回の「主要作物種子法の廃止」です。モンサント法と読んでも差し支えないほどのことです。まさにここにも安倍政権の売国的な特徴が見取れるのです。

しかしこれほどまで重要な事柄を、日本のマスコミが問題視せず報道しないというのは、これも極めて問題が深刻です。（ただ「赤旗」だけがこの問題を指摘しています）

この「種子法」の廃止については、すぐに事態が動くわけではありませんが、「アリの一穴」として、あるいは「時限爆弾」として今後その深刻さが拡大されていく危険が大きいものです。

なおこの「種子法」の廃止については、「規制改革推進会議」の諮問に沿って行われているものです。「規制改革推進会議」のような諮問会議は非常に大きな問題をはらむものです。政権が勝手に指名したメンバー（この中には米国大企業の利益を担った者が入っています）が答申をしているものにはすぎないもので、何の責任も問われないものですが、NHKなどはこの答申を大々的に報道をして権威付けをするという情報操作をしています。じつはこのような諮問会議のメンバー（「民間議員」とよばれたりする）に竹中平蔵（派遣労働をこれほど広げるようにした張本人で、同時に派遣大手パソナの役員）といった人物が入り、暗躍しているのです。

なお、このモンサントはこのほど、ドイツの大手製薬会社のバイエルに買収さ

れることになったということです。バイエルは何を目論んでいるのか。「遺伝子組み換え作物」と「医薬品」の深い関係には大きな闇がありそうです。今後注視・警戒していく必要があります。

◆ 終わりに

安倍政権は、米日のグローバル企業に向けて、日本国民から搾り取る仕組みをつくり、従来の日本の国民の命と生活を保護する仕組みを破壊して、一方で自分の関係者に利益供与をするという腐敗ぶりを見せています。このように腐敗した政権の、天下り腐敗が明かにされたばかりの文科省が、旧弊な軍国主義につながる道徳教育を復活させようとしています。さらにここで、米国防政権がシリアの空爆行ったことに対して、安倍首相は、真つ先に支持を表明するという対米従属の極みです。本来ならば、このミサイル攻撃は侵略行為であることを指摘する必要があります。

言論の自由を侵す共謀罪を国会で成立を目標している安倍政権があらゆる点からみて、反国民的であることは明らかです。そしてその反国民性は、あらゆる政策面において一貫・徹底していると言えます。これ以上安倍政権による日本という国の破壊を止めさせなければなりません。

森友学園・加計学園問題をはじめとする大疑獄事件で、安倍政権を退陣させ、「平成の治し安維持法」と言える「共謀罪」を廃案に追い込むことが切実に必要です。

◆私には夢がある

○世界の果てまで見えたと思った―

前口上を申し上げます。この度、素老人は白内障の手術を受けた。きつかけは、昨年の七月、メガネの新調に行った店の店員さんとの会話である。私の視力は右が0・1で左が0・7と不均衡であるのは知っていたが、その頃、朝起きて鏡を見ると自分の顔が妙に霞んで見えることがあった。そういうえばパソコンの文字も霞む。これまで何度もあったことで、また近視と老眼の度が進みメガネが合わなくなつたのだと単純に思っていた。

店員さんは長い時間をかけて実に丁寧に視力補正を試みてくれた。挙句に言われたのは、「前にメガネをつくるとき店の人は何も言わなかつたですか。この状態でよくメガネをつくつたのです」、「メガネをつくる前に眼科医に診てもらつて下さい」とであった。「えっ」と思った。どういふことかと訊くと、「レンズの度をいくら変えても補正が効きません。この状態で責任をもってメガネはつくれません」とのこと。今どき売つてしまわずにこんな助言をする店があるのかと思わず感心しながら、さすがに気になつて眼科医を訪ねた。しかしすぐにではない、臆病者の素老人が眼科の門をたたいたのはそれから二ヶ月後の九月であつた。

何十年振りかで訊ねた眼科医院には、あ

ふれるばかりの患者がいて度肝を抜かれた。驚きは他にもあつた。おそらくは最新の、デジタル化された小さな検査機器が幾つも並び、手際良く何種類もの検査を次々と受けて行つた。そして医師の診察。曰く、「病気ではありません。老化です。老化による白内障。そういう自覚症状が出て気が付きます。薬では治りません。大丈夫です、手術すれば治ります。視力も回復します。右も左も同じに見えるようになります。ただし、今手術を申し込んででも手術できるのは来年三月です。…角膜細胞の老化による減少を抑える(だつたかな?) 目薬を出してもらつて帰途に就いた。この目薬は、「手術の有無に関わらず、ずっと差し続けることになりました」、とも言われた。

一ヶ月後、目薬が無くなり再び病院へ。そのとき私はもう手術申し込みの書類を持参していた。放つておいたらどうなるか手術は急いだ方がいいか等々、質問は一切しなかつた。この眼科医に、私は、松江に単身赴任中二十年間通ひ続けた歯科医にどこか共通した信頼を感じていた(失礼かもしれないがこの歯科医の先生に、私は職人の誇りを感じた)。直感に過ぎないが、私の中に疑う余地は生じなかつた。そして先頃、右目、翌々に左目と、白内障手術を受けたのである。

世界の果てまで見えたと思つたのは、手術の翌日に眼帯が取れたときである。恐る恐る開けた目に、世界はあつと声が出るほどの輝きに満ちていた。検査室の何もかもが、壁も机もイスも、機器も空気までもが

まぶしいほどに白く輝いていた。手術をしていない左目だけで見ると、視界のすべてにサーとベージュ色が掛かる。右目だけにすると、また世界はきらきらと輝く。床のタイルの汚れまで鮮やかに輝いていた。外を見る―青空は限りなく青く、道路の消えかかった白線までもが白く光る。世界は総天然色であつた。

レンズを変えれば(白内障手術はレンズ交換である)世界はその果てまで透きとおつて見えると有頂天になつたが、それは束の間のことであり、すぐに、その対極にはもはや人災レベルに達したと言つべき政治の現実があることに思ひは至つた。現実世界の不透明さは何も変わっていない。不透明限らない人災政治―東日本大震災・原発人災事故から六年の現実と復興・再稼働問題、国有地払い下げ疑惑・教育勅語素読教育・瑞穂の国記念小学院認可問題、築地から豊洲への市場移転問題、トランプ・アベ問題、南スーダン自衛隊派遣と防衛相の資質の問題、オスプレイ事故や辺野古埋め立て等政府が同盟に金縛り状態になつている沖繩問題、劇場化しにくいためか最近はどこかに吹っ飛んでしまつた感のあるアベノミクス・社会保障・保育所持機児童問題、等々。世界は、五里霧中、一寸先も見えないこともまた現実ではある。

「世界は不透明で混沌としている」、しかしそれは今に始まつたのではなくて、多分、いつの時代もそうなのである。そうであれば、未来に生きる者たちに、先に生きたものは何を伝えればよいのだろう。余計

なことであるが、素老人はまたそんなことを考えた。素老人中学校長は本紙前号で年度初めの始業式のあいさつをした。そのとき明日は入学式だと言つたが、そのあいさつを述べる前に先頃行つた卒業式のあいさつを述べなければなるまい。先に生きた者としての校長のあいさつである。

○贈る言葉―私には夢がある

『皆さん、卒業おめでとう。』

皆さんはいま、それぞれの人生の新しい出発点に立っています。卒業生の皆さんが、今日、ここに晴れ晴れとした姿で立っていることを大変うれしく思います。

保護者の皆さん、今日は誠におめでとうございます。今日、私たちの学校を卒業する生徒の皆さんは、この三年間、大きな希望と不安の中で揺れ動きながら、時にはつまづき、悩み、失敗もしました。しかし、ご家族の皆さまや仲間たちに支えられ、決して挫けず、立ち上がり、前を向いて歩いてきました。今日、こうして新たな旅立ちを迎えましたことを、保護者の皆さまとともに、私たちも心から喜びたいと思います。また、今日は、私たちの中学校の卒業証書授与式を挙行いたしましたところ、年度末ご多用のなかを、PTA・同窓会の会長・副会長さまをはじめ、幼稚園、小学校、高等学校などから、園長・校長先生をはじめ、多数のご来賓の皆さまにご列席を賜りました。私たちの学校が、こうして地域各界の皆さまに支えられてきたこと、支えられていることに、改めて厚く御礼を申しあ

げます。

さて、卒業生の皆さんにお祝いの言葉を述べたいと思います。皆さん、着席して聞いてください。

私には、夢があります。夢に終わらせたくないけれど、いまはまだ大きな夢です。それは、いま皆さんがまさしくそうであるように、人生の出発点に立ち、未来に生きようとする若い人たちに期待する夢です。そのことについて話します。

若い皆さんの未来は、本来、どんなものにも負けないくらい大きな可能性を秘めた未来です。それは、冬が行き春がきた日本海のように、どこまでも青く透明で、まぶしく輝いている未来です。その未来に向かって、皆さんは、自らの肉体と精神と知を、若者らしく大いなる気概をもって磨いてほしい。そう、願っています。

皆さんが、この三年間、私たちの学校で学び、身に付けたもの、獲得したものは、本当のところは何でしょうか。それは、単なる言葉の切れ端や、知識の断片に終わっていないものではありません。皆さんは、授業で教えられたこと、教科書や参考書、百科事典、あるいは何かの専門書に書かれてあることを、ただ頭の中に詰め込んだのではないのです。それを自覚し、意識せよというのは、まだ難しいかもしれません。しかし、皆さんが学んだことは、もともとと深い人間の力に関わっています。それを知ってください。

例えば、真善美を窮める、という言葉があります。皆さんは、美しいもの、善いもの、真なるものと、決してそうでないものを人間として見分ける力を学んだのです。また、皆さんは、どんなときにも努力を忘れず、最後には必ず、『肩より高く頭』を上げて『これは昔聴いた海援隊の歌の一節であつたと思う』一歩前に歩き出す力を獲得したのです。あるいは、臆病で弱いことは、ときに批判されることがあるにしても、それは卑劣であるとか卑怯であることとは絶対に違うのだと見抜くことを知りました。人間として恥を知る心も、また、時に及んで人間として必要になるやさしさや勇氣も学びました。皆さんが学び獲得した力が十分なものか、まだ足りないのか、いまそんなことをとやかく言うつもりはありません。大事なことは、私たちは何かを学べば必ず何かを考えている、必ず何かを問うているということです。

学ぶのは世界のことです。何万年、何十万年にわたって人間が生きてきた自然のこと、人間が生きてきた社会とその歴史のこと、人間が生きて作り上げた文化のこと、つまりは、人間が生きてきた世界を学び知るのである。問うのは人間とは何かということ、つまりは自分自身のことです。私は一体何ものなのか。私は何のために、どんな用事があつてこの地球に生きているのか。それを問うのです。私たちは、生きている限り、世界を知ることと自分を問うことを無限にくり返しながら学びつづけます。そのとき、私たちには、ちょうど遠心力と求心力が釣り合うように、外に向ける目と内に向ける目が備わっていなければなりません。

皆さんの前には無限に広い世界がある。目を広く遠く、そして高く世界に向けましょう。同時に、人間のことを、自分自身のことを深く心に思いましょう。世界を知らなければ自分という人間は見えてきません。逆に、自分がいではじめて世界は意味をもって私たちの眼前に立ち現われるのです。それを忘れないでください。こうして、私たちがよく学び、それぞれが一人で立つ力を高めて行けば、自立した一人ひとりの人間が結ぶ手はそれだけ固くなります。皆さんは、人間らしい自分の個性を大事にしながら、なおかつ、他者と手を結ぶこと、社会的連帯を体現できる人間であってください。

社会的連帯などと大げさな言い方をしましたが、例えば、すぐ近くにいる人の不幸を知って、その痛みを悲しみを想像することができ、人の不幸に涙を流すというようなことだつて、社会的連帯の体現です。また、人の喜びを喜びとする。笑いをともに笑う。これも社会的連帯です。私たちは、無限に多くの人と出会うのではないことも知ってください。私たちが、自分の人生で出会うことができる人の数は、驚くほど少ないのです。これまでの出会いについても、これからの出会いについても、私たちが、いつでもどこでも人と人との間に生まれる結びつきを大切にしたいと思えます。それが社会的連帯の体現です。このことも忘れないでください。

私は、いままぜこんなことを言うのか。世界には、私たちが生きている現代社会には、さまざまな矛盾が満ち溢れているから

です。大きな話をすれば、例えば、世界には、さまざまな争い事が続きいつ果てるとも知れない。著しい富の局在と不在があり、貧富の差も拡大することはあつても縮小しているとは思えない。また、例えば、核による人類絶滅の危機は、もはや永久に回避されたと言えるのかどうか。さらには、人間の進歩がその一方の極にもたらした地球環境の破壊、それとも関連して、エネルギーや食糧の問題などはこれからどうなるのか。等々。個人が生きてゆく上で抱える当然の問題に加えて、私たちの前には、人間が協同して解決すべき課題としていくつもの大きな問題があります。

もちろん、これらの諸問題を若い皆さんがつくり出したのではない。それはそうなのだけれども、皆さんはそれを避けて通ることはできません。しかも、押し付けがましく聞かせるかもしれませんが、人類が何か大きな課題を解決し社会が飛躍したとき、それが可能になったときというのは、いつでも、それまでになかった若い人たちの力、新しい感性と新しい英知が、社会的に連帯した力を発揮したときでありました。そのときまで、大人は何もしないというのではない。私たち大人は、若い皆さんの世代に引き継ぐべきものを心して準備している。準備していなければならぬ。そして、皆さんが、どんなに困難なときにも、自分の可能性を見限ることなく、それを乗り越え、力を高め、人間精神の独立と自由、尊厳をもって一人で立つ日が来るのを待っています。

その日は、皆さんがこの三年間、私たち

の学校で、新しい文化を創ろうと模索し、また、未来の平和に生きようと願ひ続けてきたことの本当の意味に人間として向き合い、それを確認できる日になるでしょう。皆さんにとつて、私たちにとつて、その日は決して遙かに遠い未来の日なのではありません。いま、皆さんは、その日に向かつて、私たちの学校を飛びたつからです。私は、若い皆さんのその日に期待していません。そして、皆さんと一緒に並び立つ日が来るのを待っています。それが、私の夢です。この夢は決して消えることはないでしょう。

飛びたつ者たち

自由の小鳥になれ

自由の猛禽になれ

と、日本の詩人は歌いました(注1)。しかし、私には詩人の言葉はありません。最後に、私が皆さんに願うのは、皆さんが、自分の中にある最良のものに背かないこと、自分が誇りとするものを決して裏切らないこと、ただそれだけです。

長くなりました。言葉は尽きませんが、最後にもう一度、卒業生の皆さん、今日は本当におめでとうございます。私たちの学校でもに学んだ皆さんの、幸せな、誇りある人生を祈ります」

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

(注1) 詩の全文は次のとおり。

学校 あの不思議な場所

茨木のり子

午後の教室に夕日さし

ドイツ語の教科書に夕日さし

頁がやわらかな薔薇いろに染まった
若い教師は厳しくて
笑顔のひとつもみせなかった

彼はいつ戦場に向かうかもしれず
私たちに古いドイツの民謡を教えていた

時間はゆつたり流れていた
時間は緊密にゆつたり流れていた
青春というときに

ゆくりなく思い出されるのは 午後の教室
やわらかな薔薇いろに染まった教科書の頁
ななが書かれていたのかは
今はすっかり忘れてしまった

「ほくたちよりずっと若いひと達が
なにに妨げられることもなく
すきな勉強のできるのはいいなア
ほんとうにいいなア」

満天の星を眺めながら
脈絡もなくおない年の友人がふつと呟く

学校 あの不思議な場所

校門をくぐりながら

蛇蠍のごとく嫌ったところ

飛びたつと

森のようになつかしいところ
今日もあまたの小さな森で
水仙のような友情が生れ
匂つたりしているだろう

新しい葡萄酒のように
なにかがごちゃまぜに醗酵したり
しているだろう

飛びたつ者たち
自由の小鳥になれ
自由の猛禽になれ

哲学者のつづき (33) 「付度」を哲学する

祖蔵 哲

前月号では、昨今の「天皇退位発言」をめぐる議論のなかで「近代天皇制」を哲学した。本来、「天皇制」というもの自体が政治支配機構そのものである。古代の諸権力抗争の後、生き残った権力者の支配機構が「天皇制」そのものであり、その支配の正当性を後づけするために創作されたのが国内向けの「古事記」と外国向けの「日本書紀」である。人間の深層心理「心」に定着させるために「神話」

「共同体」を統一し、「外国」という「外敵」に備えるための「政治的統一」手段である。その「外敵」の再来「近代版」が「明治期開国」という「事件」であり「外圧」であった。

つまり「開国」という「西欧文明」に

対する「文明開化」。そして「倒幕」の「理論的正当性」としての「尊皇攘夷」。この「ジレンマ」は現在でも「劣等意識」として続いている。さらに「捻じ曲げられた」のは外国産中華思想である「儒教」の取り込みである。「神話的」「心」としての「天皇制」はさらにそれを目に見える「形」を必要とされたのである。「おもい」ではなく「力」としての「行動」それが「道徳」である。「忠」「孝」という「儒教道徳」を「天皇制」に取り入れ「家族—共同体—国家」という「三位一体」

思考を作り上げた。これは、「西欧」のキリスト教の「子—精霊—父」の「三位一体」に対応するものである。このように「近代天皇制」というのは、「西欧世界」スタンダードに適合させるために日本の支配権力体制である「天皇制」を二転も三転も捻じ曲げたため自己矛盾に陥っている状態と言える。残念ながら「近代天皇制」に古来「美しい日本」の影も形も残っていないのである。

以上が先月号での主旨です。そして予告ではこの日本が明治期に遭遇した「西欧」そのものが「近代」であり、この近代にまだなりきれない日本の潜在的「劣等的自己意識」を「承認」というキーワードで読み解くとしていたのですが、急遽変更してもう少し「近代日本的意識」を「哲学」します。というのは、この意識が根底に流れているのがいま現在も国会、マスコミ等で盛んに取り上げられている「付度」という日本独特の言葉だからです。

この発端は、皆様もよくご存知の森友学園長、籠池氏の国会証人喚問での発言です。この国会発言のあと籠池氏は外国人記者クラブで会見を行いました。その際にこの「付度」を英語に訳すのかで議論になった。問題はこの「主語」は誰かでした。最初は安倍夫人が主語とされていたがそれはすぐに訂正されました。それほど外国人にとつてこの言葉は混乱したようです。しかし、その後フィナンシャルタイムズという米国の経済新聞がそのこのことに関して記事を載せた。少し長

くなるが引用しよう。

『一見したところ、スキヤンダルまみれの幼稚園と、不正に水増しされた東芝の会計不祥事、クビになったニュースキヤスター三人とを結びつけるものはほとんどない。だがめつたに使われない日本語、「付度」がすべてを説明し始めている。日常語彙とかけ離れたところから引つ張り出され、突如、表舞台上に上がることを押しつけられた言葉だ。

付度は、与えられていない命令を先取りし、穩便に従うことを指す。この言葉は日本人に広く使われていないかもしれないが、政府、民間部門でいろいろな形で普及していることは、すべての人が本能的に知っている。付度の概念は日本特有ではないものの、安倍晋三首相時代の日本を説明するうえで、これほど強力に影響く言葉はそう多くない。』

さすがに一流の経済新聞、見事に日本的経営や風土を言い当てている。私たちが当の日本人さえ気がつかない、「東芝会計不祥事」「ニュースキヤスター三人(降板)」「ちなみに三人とはテレビ朝日古館氏、TBS岸氏、NHK国谷氏)を「付度」と結び付けている。そしてさらに「付度」を「日本特有ではない」としている。日本人以上にこの事態の本質を捉えている。

「付度」は「ヤマト言葉、日本語」ではない。これは「儒教」からきている。儒教の特徴は祖霊信仰と官尊民卑。先祖を敬い、子孫を残すことが「孝」であり、親子、男女の関係は「孝」を大切にする

あまり男尊女卑である。女は子孫を産むために存在意義を見いだされるので、必然的に社会に出ることがない。これは根本的に「和」を尊ぶ本来の日本文化と異なる。儒教とは律令制、すなわち官僚制度を擁護保持するための思想である。

なるほど「付度」自体には「善悪」はない。他者の心を推し量るといふ程度の意味であり、例の「空気を読む」と同じような意味ととられる。しかし、注意すべきことはこのような「儒教用語」は全て支配者の「道徳用語」であるということである。ある知事は「付度に良いも悪いもない。やつてはいけない付度とやつては良い付度があるだけだ。」と発言した。そして一部マスコミも「大衆の声を聞く付度は大いに結構だ」という意見も出てきた。唾然とする。こういったところに「近代的ジレンマ」を残している日本の姿がある。これもまた、「美しい日本」というが中身は彼らの嫌う外国産「中華思想」である。

「家族—共同体—国家」という三位一体構造の上でこの「付度」という「以心伝心」を可能にするのはどの範囲までなのか。単一の価値観で社会が成立していた「家族—共同体」という近代以前の世界であればこのようなことは可能であったであろう。しかし、西欧型「近代」は「個人」が「家族」から独立した世界である。つまり「個人」対「家族—共同体—国家」である。「個人」はこの「社会」に対して「以心伝心」は切断されている。それはその都度、「言葉」やその「現され

たもの「文書」で示さなければならぬ。だから、「記録」が必要なのである。今回の「付度事件」では全て「記録」が「抹殺」されている。ここが本来本質なのであろう。

民主主義とは多数の意見を「尊重」することである。それは「付度」ではない。民主主義の基本理念の一つは「公開性」である。どのような過程で意見が決定されたのか。それが非常に重要である。なぜなら民主主義は「多数決」であるからである。「少数」は「多数」に従わなければならない。正当な手続きをもって決定されたが重要になる。

「付度」が政治を動かすようになるのは「独裁」政治の始まりである。「支配権力」を「付度」しそれを「輔弼」する。「権力意志」を「推し量って」「権力を行使」し「その責任は」「支配権力」におよばない。『無責任体制』あの『いつか来た道』である。

大峯奥駈道 (10)

梵店主

六甲山の縦走もいよいよ最終コースに入ってきた。六甲山最高峰から宝塚へ下る長丁場の尾根をラテで照らしながら、熊さんとよつちゃんも歩いている。足がひきつりそうになり思うようには歩けないが、何とか歩き続けていた。

朦朧とした意識が襲うたびに、よつちゃんも、これまで退院してから毎日歩く訓練をしてきたことを思い出していた。冬の日も朝早く起き薄暗い堤防を手袋して七キロを歩き続けてきたのだ。毎日毎日朝と夕にリハビリに励んできたのである。

疲労困憊した時に自分を励ますのは、これまでやってきた訓練である。あれほどやってきたのだから、やれるはずだという自己暗示なのだ。だから、身体的なことと同じように精神的な強さがものをいうのであった。

前を歩く熊さんの背中に無言の励ましを感じながら、よつちゃんはただひたすら宝塚の街の灯が見えるのを祈るような気持ちで歩いていた。もうそろそろ見えてもいまいだろうと何度も思いながら尾根を歩いてくると、南の方角に霧にかすんだ街の灯が見え出してきた。きつと川西や尼崎、大阪の街である。宝塚でない、宝塚は西の方角だからまだ歩かねばいけない。

しばらくして、塩尾寺に続くと思われ歩きやすい山道になった。もうすぐだと思い、よつちゃんは、ほっとした。木々



の間から宝塚と思える街の灯がちらほら見え出した。もうすぐゴールが待っている。塩尾寺の入口に着き参道を下っていく。足の筋肉が引きつり膝もガクガクで坂をまっすぐに歩けない。後ろ向きに歩くとはなる。真つ暗な道を後ろ向きで歩くのは怖い、まわりに誰も歩いていないので、よっちゃんはずつくり前向きになったり後ろ向きになったりしながら歩いた。ゴールの近くになると兵庫県勤労者山岳連盟の人が電灯を持って迎えてくれた。

テントが並ぶゴールはライトで照らし出されていた。よっちゃんと熊さんは制限時間ぎりぎりの十五分前にゴールした。すぐに係りの人から第四九回六甲山縦走の完走証をもらい、用意されていたお汁粉を頂いた。冷え切った体を熱いお汁粉が温めてくれる。

よっちゃんは、自分たちが最後だともっていたが、まだ遅い人がいた。お汁粉を食べながらゴールを見ていたら一人また一人とゴールした人がいた。よっちゃん、熊さんに「制限時間ギリギリのゴールにはドラマがあるなあ」と語りかけた。この大会には運営上制限時間が設けてある。朝の五時半に須磨浦公園を出発し夜の九時半までに宝塚に到着しなければならぬ。

もし、九時半を越えてしまつたら途中棄権となる。須磨浦から歩き続けてきて、最後のところで歩き疲れて遅くなつて制限時間をオーバーしたら失格になる。こ

のことに参加者はよく理解しているから最後まで気を抜かず頑張るのだが、高齢者にはなかなか辛いものがある。

よっちゃんは、ギリギリでゴールしたからよくわかるのだが、十五時間も歩き続けてきて最後の十五分が勝負になるとは何ともドラマチックではないか。この大会は競争する大会ではないのだが、自分との戦いは最後まで続く。諦めればその時点で終わりである。いつでもすぐに終わりに出来るのである。そのうえ制限時間内で歩き通さなければ失格となる。

途中棄権する人は二割位いるという。よっちゃんにはよく理解できる。制限時間におびえながら歩く人にとって最後の六甲山最高峰から宝塚までの十四キロは、厳しい自分との戦いになる。いくら疲れていても止めるわけにはいかない。だれも助けてはくれないし、自分で歩く以外に道はない。

こんなわかりきつた事を幾度も繰り返して自問自答しながら歩いているのである。余裕をもってゴールする人がわからないドラマを味わっているのだ。よっちゃんには、自分が味わったこの非常に厳しいドラマがゴールした瞬間、パツと飛び去って消えてしまったように思えた。今度は苦しみが快感に変わり、なんととも言えない達成感となつて心を満たしたのである。

この快感を味わつたら、もう止められなくなる。その時よっちゃんは直感した。熊さんが十数回も毎年参加している理由の一端を理解したように思えた。

連載「おつちよこチヨイばけ」(48)

——昭和女、どっこい日記——
大阪万博、絶対反対!…の巻

東日本大震災からの復興も完全にできていないのに、東京オリンピックピックなんかやっている場合かいな!…という駄文は以前に書いた。

その後、エンブレムだかロゴだかの盗作騒ぎ、競技場は予算オーバーで急遽、設計からやり直し、ポルト競技などの開催場所でも揉めて、とゴタゴタ続き。もう決まってしまったことだし、たくさん

の人が心待ちにしているみたいだから、「ほらね、言わんこつちやない。やめてきて言うたやん」というような大人げないことは言わないが、東京オリンピックに続いて今度は大阪万博を再び、だ。

一体、だれが、やりたいと言いついて、だれが推進してるんだ? 籠池さんの仇敵の大阪府知事? 自民党の議員? 経済界? 土建屋? 肝心な大阪府民の皆さんはどう思っているんだろう?

私とて、経済の活性化とやらが大事だということとはわかる。だけど、会期があるものに莫大なカネをかけ、それで喜んで潤ったりするのは、ごく一部の人間ではないのか?

国や自治体にたんまりお金があつて、余っているから「万博でもやつちやおうか」というのなら、わかる。だけど、現状を見てほしい。年金はどんどん目減り

して、死ぬその日まで働かなければやっていけない、と思つている人の多いこと。待機児童の問題がクローズアップされているけど、特養に入れない待機老人の問題も深刻だ。府と国、産業と福祉、お金の流れはそれぞれ違つて指摘されようだが、もとは私たちの税金ではないか。万博なんかに大事な税金を使つてほしくない。

「バカだな。万博は出展する企業がカネを払うし、入場料も取るから国や自治体は儲かる仕組みになつてんの」と言う人があるかもしれないが、私はマユツバだと思ふ。

冬季オリンピックの後の長野、北京オリンピックの後の中国、リオの後のブラジル: そうそう、ヨーロッパの経済危機の元凶といわれるギリシャも、二〇〇四年にアテネ・オリンピックなんかやつちやつてたし。万博もオリンピックも一緒に、多額の税金を使った後、必ず、経済危機に陥つているのだ、貧しい国は。日本は貧しくない、と反論する人がいるかもしれないが、はつきり言おう。アナタ自身は金持ちかもしれないが、無知だ!

ちよつと調べたらわかることだが、去年、財務省が「国の借金」として発表した金額は一〇六二兆五七四二億円。国民お一人さまあたり八三七万円なんですと。

我が家で考えてみると、九〇歳の母に八三七万円を払う力は毛頭ない。

姉夫婦は年金暮らし、義兄が働いて蓄えたお金が多少はあるようだが、その隠

し金から姉が払うわけがない。義兄も姉も年金を除くと無収入なのだ。弟一家。大学と高校に通っている男子が二人。その学費や交通費に追われている状態で、とてもじゃないが払えない。

そして私、吹けば飛ぶような浮草稼業というわけで、母を中心とした家族八人、国家の借金負担能力、全員ゼロ。

私の周りを見回して、払う意思があるかどうかを別として払えそうだなと勝手に推測できる人はせいぜい三人。国の借金を背負うどころか、特養などでお世話になって、国の借金を増やしてしまいそうな人が私を含めほぼ全員。

だから、税金を「やつてもいいが、別にやらなくてもいい」ことに使わないでほしいのだ。年を取れば、だれでも働けなくなる。それなのに、医療費の負担は減るどころか増える一方。介護保険の負担も年金生活者には厳しい。そんな国で、ウハウハ、税金の無駄遣いになるようなことをしている場合か？といたい。

「それは年寄りの意見だ。若い人たちにはグローバルな刺激が必要だ」と言う人がいるかもしれないが、万博なんかで、そんな刺激を受ける時代か？

若い人たちは、大阪万博を開催してほしい、ぜひ行きたいと思っているのだろうか。

そりゃあ、開催されれば、日本人のことだ。老いも若きもゾロゾロと繰り出すだろう。生きていれば、私も行く（なんだ、そりゃー！と言わないでほしい。此花

区だから、近いし）。

つまり、一般民衆は流れに流されるのだ。その結果、いわれのない借金がさらに増えて、福祉がお粗末になり、見えないうところで人々が苦しむ。

友だちのお父さんは、幸運で新設の特養に待機せずに入れた。だが、病気になるって入院している間に、その特養は出なければならなくなった。もちろん、別の利用者に譲らないともったいないという理屈はわかるが、お父さんは帰るところがなくなった。認知もあって、家族で介護できるような状態ではなかったそうだが、病院の方は「治療をしない場合は出てもらう」と別のリハビリ病院に転院をすすめ、友だちは頭を抱えていたが、「お父さん、そう長くはないと思う」と言っていた。ほどなくして、お父さんは亡くなった。特養も病院も私の友だちも悪いわけではないが、「高福祉ではないよな」と思わずにはいられない。

それは、ベースになる「真の豊かさ」が個人にも国にもないからだ。表面的な豊かさは、人によって違うだろうが、そこそこはある。捨てることに一生懸命になるほど家にはモノがあふれ、ダイエツトに励まなければならぬぐらい食べ物がある。ただ、すべての人が安心して天寿をまっとうできるような豊かさはこの国にはまだない。そういう方向に進んでもいい。

東京にオリンピックを、という招致合

戦を繰り返して来たとき、当時の都知事の猪瀬さんが「オリンピックを開催するための費用はすでに都で確保してある」と豪語していたが、その後、いろいろ値上がりしたとかいって、国が負担しなければならぬことになった、というようなニュースを聞いた。イジワルな私は「やっぱりな！」と思った。東京でさえ、そうなのだ。中小企業が多くて、青息吐息な財政の大阪で万博って、笑っちゃう。

でも、日本は民主主義の国だ。万博、是非か、国民投票ならぬ府民投票で決めてほしい。その前に、いくらかかって、業者がどれほど儲かって、そこからいくらの税金が取れて、最終的に府の財政がどうなるのか、正直に教えてほしい。森友学園の騒ぎで、エラそうに見える人たちも自分を守るためには平気で嘘をつくんだなということを改めて思い知った。大阪万博開催計画の収支に嘘は許さない。想定外も含めて、全部、正直にさらしたうえで、やるかやらないか、府民に決めさせてほしい。ついでに、計画書に嘘を盛り込んだ人が一人でもいたら、それは「死刑」でお願いします。

(A0)

孫ウオツチング (16)

福田 圭

昨年の地震の影響で、三徳山三佛寺投入堂（土門拳も写真におさめている鳥取県の名所）が崩れのため入山禁止になっているという。また、大雪の影響で鳥取砂丘にハート型の「オアシス」（オアシス風の水たまり）が現れた。光ちゃんが生まれた時には予想もできなかった出来事が起こっている。未来など誰にも予測はできないものだ。

そんな中、光ちゃん（ペンネーム）の発達 は確実で、目を見張るものがある。歯の数は母親もわからないほど「いっぱい」になり、普通の食事がとれるようになっていく。

何といつても、一か月前は、おじいちゃん と手をつないで部屋の中を歩く程度だったのが、保育園の帰りに自力で約五〇〇メートル「お散歩」が出来るようになっていく。三月五日に光ちゃんが初めてのお散歩をした。まっさらな白い靴を履き、ヨチヨチ歩きをする姿は、可愛いことこの上ない。

コミュニケーションもしっかり取れた。おじいちゃんが「こんにちわ」とハイタッチを求めるとハイタッチを返してくれる。ジュースがいらないければ、ハッキリと拒否をする。お歌ちゃんの前で言葉を使うのも初めてだ。お父さんに対してはお母さんに対して「タータ」と話しかける。また区別はついていないようだ。次に行くときはほとんだけポキヤブラーが増えているのか楽しみである。

三月二十七日（月）光ちゃんが一歳半の時点での「孫ウオツチング」でした。

今回は、大人向きのお話です。教科書に出る心配は全くないので、教科書に出ない度は五／五。

女、医者のもとで治療を受け、逃げた話し (巻第二四ノ八)

今は昔、典葉頭のりのかみで、某という名高い医者がいた。名医として評判だったので、人々はみなこの医者のもとを訪れた。

ある時、この典葉頭のもとに、この上なく美しく飾って、鮮やかに出衣いだしぎぬをした牛車の女車が入って来た。頭はこれを見て「どなたの車じゃ」と周囲に訊ねたが、答えられる者はいままでに、ただただずんずんとその車は奥に入ってきた。勝手に牛をはずして、車の長柄を建物の部かみの元に打ちかけて、随行の使用人たちは門の脇に控えた。

典葉頭はその車に近寄り、「どなたがおいでになされたのかな。どんなご用件でしょうかかな」と問うと、車の中から誰とは名乗らず「適当なところに部屋を用意していただけますか」と、可愛気のある声で答えてくる。この典葉頭、もともと好き者のじいさんだったので、さっそく自宅の離れを急いで掃除させ、屏風を立てたり畳を敷くなどして、準備ができると、車に近寄って準備が整ったことを伝える。と、女は「ならば、お離れくださいませぬか」と言うので、典葉頭は距離をとって遠巻きにしていると、この女

房は扇で顔を隠し、いざり降りた。「この車には供の人が乗っているだろう」と想像したが、女一人だった。女が降りると、十五六才ばかりの下女が、車のもとに寄ってきて車の中にあつた蒔絵の櫛箱くしばこ(便器として使われた)を持ち出してくると、車は供の使用人たちによって牛がつられ、飛ぶように去っていった。

女房はしつらえた部屋に落ち着いた。子供の下女は櫛箱を包み隠して、屏風の後ろにかしこまり小さくなっている。

典葉頭が近づき「これは一体どなたが、どんなことを仰せられるのでしょうか。どうぞ早くおっしゃられい」と言うのと、女房「こちらに来て下さいませるか。恥ずかしがりやに致しませぬから」と答える。典葉頭、そこで簾すだれの中に入った。

そこで差し向かう女房を上から下までじっくり観察すると、年は二十才ばかり、髪からはじめ目・鼻・口、どこをとっても欠点はなく美しく、髪は極めて長い。たき込めた香が極上に香る衣をまとっている。恥ずかしそうな様子も見せずに、長年の恋人のようなうち解けた感じ座っている。

典葉頭、このさまを見て「何とも不思議なこと。この女は自分の意のままになりそうだ」と生唾を飲む。歯が抜け黴だらけの顔をニヤニヤさせて、女に近寄り問いかける。まして典葉頭は長年連れ添った妻を亡くして三四年になっていたの「嬉しや」と内心喜んだ。女の言うには「浅ましいのは人の心でございませぬ。命惜しさには、どんな身の恥をさらして

も、命は助かりたいと思ひ、ここに参りました。今となりましては、生かすも殺すもあなた様のお心次第でございませぬ。わが身をお任せいたします」と、泣き伏す。

典葉頭、この女を哀れと思ひ「どんなご事情がおありなのじゃ」と問えば、女、やにわに袴はかまの切れ込みを引き開けて見せる。股が雪のように白いところに、少し腫れている。その腫れが不審に見えるので、袴を解かせて前を見れば、アンダーヘアの中に隠れて見えない。典葉頭、手でもってそれを探ると、局部のすぐ近くに腫れ物があった。両手をもってヘアを掻き分けて見ると、それは生命に関わる危険な腫れ物であった。

診断としては「何々」であり、治療の難しいもので「ベテラン医の面目にかけて、あらゆる秘術を駆使して取り出そう」と決意し、その日から、余人を寄せ付けず、自らたすきがけで、夜に昼に女の治療にあたった。

七日間ほど懸命の治療をして、病は治癒してきた。典葉頭、大いに喜んで「もうしばらくは女をこうして置いておこう。素性を聞き出してから帰してやろう」と策略をねって、今となっては患部を冷やすことを止め、陶器の器に何かしらの薬を混ぜ合わせたものを、鳥の羽でもって一日に五六度付けるだけになった。「もう大丈夫」と典葉頭の顔もほころんできた。

女房の言うに「見苦しいところまでお見せしてしまいました。あなたさまは、ただただ命の恩人と感謝しております。

なので私が帰りますときには、お車で送ってくださいませ。そのときに私の素性を申し上げましょう。またここにも度々来させていただきます」などと言うので、典葉頭「あと四五日はこのままにしよう」と考え、油断をしていると、ある日の夕方、その女、寝間着の薄い綿入れ一枚だけで、小間使いの少女一人を連れて逃げた。

典葉頭は、そうとも知らずに「夕飯を差し上げましょう」と言って、自身で膳をもつて入ると、女の姿はない。「用便中のだろう」と思って、その時は引き返した。そうこうするうちに、日は暮れはてたので「まず火を灯そう」と燭台に火を付けてもつていくと、衣などが脱ぎ散らかされている。櫛の箱も放置されている。「長い間屏風の後ろで何をしているのだろう」と、後ろにまわってみるが、そこにもいない。小間使いの少女もいない。衣を重ねて着ていたが、袴もそのまま残っている。ただ寝間着に着ていた薄物の綿入れの一枚だけが無くなっている。「あの人は行ってしまった。これを着て行ってしまった」と思うと、胸が締め付けられる思いで、じっとしていられないほど。

一門を閉ざして、ありつたけの使用人を使って火を灯して、家中を探させたが、むろんいない。典葉頭は、女の顔つき、仕草など目の前に浮かんで、恋しくて悲しいこと限らない。「病を気にしないで、本意を遂げておけばよかった。なぜ治療をするだけで、手をだしておかなかった

B級サラリーマン渡世譚 (45)

明石 幸次郎

のか」と、悔しく「妻もない自分であり、遠慮をする相手もないのに、他人の妻であったなら、妻にせずといえども、時々密会をするには絶好だと思っていたのに」と、つくづく後悔をした。このようにも逃げられたのを、手を打ち足を摺るほどに悔しがり、しよげかえって八の字眉で泣き続けた。

これを見て、弟子の医者たちは、裏で笑いあった。世間の人もこれを聞いて、典葉頭に笑い顔でこれを訊くので、言い争いになってしまふのだった。

思うにこの女房はしごく頭のよい女であつたことだ。この女の素性は、ついに誰だとも知られずに終つたということだ。

《コメント》

このコーナーに「大人の」と付けた面目躍如の話です。日本の古典の中にこのような話もあることを知っていたかどうかことは、意味のあることだと思います。古典を子供たちの教科書の中だけに閉じこめておくのはもったいないというのが、私の持論です。あわれな典葉頭の姿は、むろん戯画化されていますが、なかなか哀感も感じさせます。

またディテールがしっかりと描かれているのも特筆に値します。

私はこの話を読んでいて、不倫の果てに亡くなってしまった妻を思いながら、自らも自滅していく田舎医者・ボヴァリー氏の後ろ姿を、なぜか連想してしまつたのでした。

打ち合わせは、わずか三〇分程で終了した。明石が心配していた出荷日程も船積みのスケジュールに、何とか間に合う見通しが立った。

東京のM商事を出てから、ずっと抱えていた胸のつかえが取れて、すっきりした気分になった。部屋を出る前に、改めて打ち合わせ参加者に頭を下げ、お礼を言った。特に同期と分かつた資料課のM本には、「納期短縮で無理を言つて申し訳ないが、宜しく頼むわ。今日は、六時から歓迎会があるので、これからトンボ返りして大阪に戻らないとアカンのやが、次に宇都宮に来る時は連絡するので、君が毎晩通っている店に連れて行つてよ！」と言つたら「分かつたよ。アンタが難波で行っているような、上品な店ではないで。これから大阪に戻るのか？六時には戻れないなあ。歓迎会に遅刻か？いくら事情があると言え、営業も大変やなあ」と同情を示してくれた。

明石は「工場長に挨拶してから、大阪に戻ります」と皆に頭を下げてS沢の後に部屋を出た。

S沢は「明石さん、ご苦労さんでした。何とか輸出部の要望に沿えることが出来るそうですね。それと、明日は必ず正式製作通知を送つて下さいね！工場長は、今おられる様です。案内します」と親切に工場長室まで連れて行つてくれた。

S沢がドアをノックすると「はい」とい

う低い声がしたので、「工務課のS沢です」と名乗り入つて行つた。S沢は工場長が座っている机に近づき「M君さんの後任の輸出部の明石さんをお連れしました。昼から、急遽こちらに来られ、例の韓国向けCKDの納期打ち合わせを行っていました。何とか韓国側の希望に沿える方向でやっています。明石さんもM商事から正式オーダーを今日、貰つたという事で、明日、製作通知を送つてもらえそうです」

「そうか、それは、ご苦労やうだ。まあ、そちらに座つてくれ」と言つて自ら機の横にある応接用のソファに座つて、S沢と明石も向かいに座らせた。

「ああ、明石君か？確か、君が二年前に堺に来た時は、私は入れ替わりで宇都宮工場長としてこちらに転勤になった。君が今度は輸出部に転勤して、我々の工場を担当してくれることになったのか！この工場の輸出比率は話にならない程低い。

海外売上拡大の為に工場として出来る限り協力するので、宜しく頼むぞ！それに、今回のような韓国側から直接、私の所に問い合わせとか、要望が入ってくるのは、輸出部員が先方とのコミュニケーションが足りないか、相手から信頼されていないか、相手にこちらの立場を理解して貰う努力が足りないかだと思つてしまふのだが、どうだ。其処は、そういう事が無いように頼んでおく。明石君は、あの堺工場で鍛えられたので、工場が営業に対して要望することは良く分かつてくれていると思う。日頃から窓口の工務課とのコミュニケーションを取るようにお

願いしておく。情報は関係者が共有しないといけない。それと仕事は、自分だけでは、出来ない。我々、メーカーは、良い製品を造つて、それを買って貰い、その製品がユーザーから高い評価を得て、ブランドが普及するのである。海外での会社のブランドを多いに広める事に努力してくれよ」と偉ぶるでもなく、指示するでもなく、明石がこれから仕事をする上での心構えを淡々と話してくれた。この人の長年に亘る工場の購買部門を歩んで来て、築き上げた経験と知識、それに修羅場を何度も切り抜けてきた自信と何よりもその仕事を通しての多くの社内外の人脈が、工場長という役割をこなす自信に繋がっていることを感じた。

それに、二年前に転勤した時に挨拶に行つただけなのに、よく自分の名前を憶えてくれていたと、単細胞の明石は、それだけで、大いに感激した。

明石は、素直に「分かりました。アンテナを高くして、情報が入り易くして、S沢さん等とのコミュニケーションを密にして、何よりも客先との信頼関係を築くことに努力していきます」と、答えた。「そうや、自分が信頼され、この人とならば、商売が出来ると言わせるだけの関係を築かないとなあ。まあ、頑張つてくれよなあ」と笑顔と真剣な表情が入り混じつた顔つきで話をされた。

明石はこの人から色々な事を聞きたかつたが、歓迎会の時間が気になつて「工場長、今日は急な打ち合わせにも関わらず、S沢さんを始めとした関係者の皆さんが前向き

オクラの山たより (7)

困生

に対応して頂けることとなりました。有難うございました。工場長が何よりも相手の立場を配慮して、納期短縮に前向きな回答をして頂いたお蔭で、急に話が進み出しました。韓国側も尻に火が付きましたので、いたたまれず、協力してくれと、直接、工場長に話をした方が早いと思つたのでしようか？相手のメンツをつぶさず、対応を頂けたのは、感謝致します。これからも宜しくお願いします」と言い終わり、立ち上がろうとした時に「そうや、大事なことを明石君に言い忘れそうになった。CKD部品の価格だが、君も堺で経験したと思うが、短納期でしかも、海の内こうに運ばないといけない。仮に一つの部品に問題があつても、製品が組み立てられないと言うことになれば、ラインが止まってしまい大きなロスが発生する。その為には、部品出荷前の検査を協力会社、メーカーは当然の事として、ウチでも嚴重に行う様に指示している。それだけに、コストが掛かってくるのは、分かつて貰えるわな。梱包もかなりのコストをかけて、部品にダメージが生じないように手間をかけている。

それを十分に理解して、価格交渉してくれよな。頼むぞ！」と最後に言わなといけないことを力強く、有無を言わせないような口調で言われた。

明石は納期問題が解決したことで、胸のつかえが無くなったとたんに、工場長の暗に価格交渉で値上げしてくれよ、という言葉で、又、胸がつかえてきた。咄嗟に「分かりました。何とか、頑張ります。これで、失礼します」と言つて立ち上がった。

十二世紀はじめに右大臣にまで至つた藤原宗忠の日記「中右記」の天仁元年(一一〇八)四月二十五日の条に次のような記述がある。

去、んぬる夜、夜半に強盜、二条富小路の人家に入る。あまたの物を取り、家主の五位を殺害し了んぬ。近隣の少内記光遠出で来て、彼の難を助けんがため二条大路に出づるの間、検非違使の郎等の為に射殺せられ了んぬ。光遠はこれ文士なり。人の難を防がんがため出で来て、流れ矢のあたりてついに天命す。大至愚の者といふべきか。

二条富小路の五位の家に強盜が入り主人は殺された。近くに住んでいた少内記(詔勅の起草などを行う中務省の最下層の事務官)であつた光遠が近所の危難を救おうと飛び出し、誤つて検非違使の放つた流れ矢にあたり死んだという記事である。事務官である者が飛び出して強盜と戦おうなどとは最低最悪の愚か者だと藤原宗忠は言っている。この当時、強盜が家に押し込んだら「強盜だ」と四方八方から大声で叫ぶのが普通の対処の仕方であり、強盜と戦うのは検非違使となつた「兵」の家の人々の仕事であつた。院政期ともなると強盜、強盜、群盜と呼ばれた者たちはプロの戦闘集団であり、

平氏や源氏といった郎等を多く従えた武者たちでなければ戦うことなど無理であつた。また、強盜が五位の家に押し入つたのには理由がある。つまり、五位とは実入りの多い大國ないしは上國の受領になることができた位階であつた。領國で領民を締め上げたあげくに三代は遊んで暮らせるほどの財を成し、京の自宅にあふれんばかりの財物を積み上げたところをねらわれたのであろうか。この話、京童たちが噂し合うネタとしてはどうも地味すぎたのか、「今昔物語」といった説話物には残念ながら入っていない。ただし、よく知られているように「今昔物語」には多くの強盜たちが登場する。もちろん、それだけ多くの強盜が平安京に出没したということだが、その事実が「病者」や「孤児」と同様に平安京の特質をよく示しているかもしれない。内容がまたまた少し暗くなるが、貴族の華麗な世界の向こう側に広がる闇の世界から平安京の姿を今一度みてみようと思う。

さて、まず強盜が生まれてくる理由であるが、これは古今東西、いずれも同じである。まずは貧困と飢餓の二つである。天候異変が危機的な飢饉を引き起こし、飢民・流民が地方の村落から次々と離れていく。家を捨てて土地を捨てた人々はやがて都市を目指して移動する。たとえ飢饉にあつても多少なりとも蓄えがある社会であれば、そのおぼれにあずかることができる。一つの地域で凶作が発生し

ても、それ以外の地域から食糧を調達できる富と力があれば、その社会はさほど困ることはない。都市とは本来そのようなところであつた。だから飢饉・凶作となると生活に窮した飢民・流民は都市にある「スラム」へと流れ込む。平安京には右京(京の西側)や六条以南には空地が多くあり、廢屋となつた貴族の邸宅から材木を持ち出して簡単な板屋であれば建てることは可能であつたろう。そうした家が密集して「スラム」ができ、この「スラム」が犯罪の温床となる。強盜は単独ないしは二、三人程度のそれと、組織化された群盜集団があり、後者はほぼ「戦闘集団」であり「首領に指揮された宝を求める武士たち」といつてよい。九世紀半ば以降ともなると王臣の子孫や良家の子弟が強盜集団を組織し、その首領となつていくことが多くなる。

黒田絃一郎氏が「今昔物語 本朝部」にある強盜譚の調査を行ったところ、引剥(着ている物を身ぐるみ剥ぐ行為)などの「単独犯行」の件数が「数人から群盜」のそれをわずかに上回る。意外と「単独犯行」が多いことは強盜団が夜の平安京を跳梁するという我々の想像を裏切るが、これは「今昔物語」の世界が平安後期の都市生活の日常性をふまえて成り立っているためであらう。京では引剥が日常的な犯罪として起こっていたのである。たとえば寺社への参詣がたいそう好きな

女主人が女童を連れて寺参りに行ったところ、雑色（貴族などに仕え雑用などをする身分の低い人）の男に主従ともに衣服をすべて剥ぎ取られている（『今昔物語』巻二十九 第二十二）。犯人は後に盗みをして一度は獄に入れられたが許されて放免となった男である。放免とは時代劇で見かける岡引きと同じような仕事をする、つまり警察機関の人間である。

こうした庶民層が引剥をした例で有名なのは羅生門の男である。この男は羅城門の上層で死んだ若い女の髪を抜きとる老女を見つけ、その老女と死人の着ていた衣服を剥ぎ取った。摂津国の国から盗みしようとして京にきた男だが、おそらく国元で生活に困り財と力にあふれた京にやって来たのだろう（『今昔物語』巻二十九 第十八）。この話は芥川龍之介が小説「羅生門」の材料にしている。

また、長和二年（一〇一三）二月十八日、藤原道長は検非違使たちが清水坂（清水寺への参詣路で葬地鳥辺野や山科、奈良へ通じる要衝であった）で通行人の物を奪っていた盗人を捕えたという報告を受けている。盗人は侍医河内延通の息子だという。この男は流民などではなく京の中に住む者であった。

さらに例をもう一つ。長暦二年（一〇三八）に盗人が内裏の台盤所（天皇が居住する清凉殿の中にある女房たちの詰所）に忍び込み女房たちの衣服を盗み取っていた。蔵人や滝口武者たちがどこ

を捜しても出て来ない。盗人は内裏に仕える女官の一人ではないかと人々は噂し合った。もちろん内裏の女官になるには庶民では無理で一定以上の家柄でなければなれない。

以上、いくつかの例を見てきたが、この時代の京では生活困窮者だけではなくさまざまな階層・分野の人々が容易に単独犯行者になり得たのである。

しかし、こうした単独犯行が日常的に横行していたとはいえず、何といつても我々の目を引くのは組織化された群盗たちの記事である。その例を二つ紹介しよう。前者は首領の身分に注目、そして後者は事件の意外な展開ぶりに注目である。では、最初に「エツ」と驚く盗賊団とその首領の話から。

応和元年（九六一）五月十日のこと。京の人々を仰天させるような事件が起きた。前武蔵権守源満仲の邸宅に強盗が押し入ったのである。源満仲といえは、源頼朝や源義家という清和源氏の先祖であり、「殺生放逸（殺人はやりたい放題）」と噂された軍事貴族（貴族でありながら戦闘集団を郎等に持つ人のこと）である。今でいえば自衛隊の駐屯地に多少は武装した集団で押し入って強盗を働いたようなものである。これだけでも驚きだが、その首領や手下が類を見ないものだった。首領は醍醐天皇の子である式明親王の二男である従四位下親繁王、手下には宮内丞（宮内省の三等官）、清和天皇の曾孫と

いった面々であった。天皇家の血筋、それもかなり近い人が首領であったことに驚かされる。恐らく「ワツ」と勢いに任せて押し入ったのだろうが、さすが「兵の家」である。少しばかりの物を奪ったもののあえなく撃退され、あろうことか

手下の一人がその場で捕まり、その者の口から強盗団のメンバーがすべてばれてしまった。さっそく検非違使たちが式明親王邸に急行したが、そこは人の親である。親王は「我が子、親繁は重い下痢でずっと寝ています。無罪です。」とかばい続ける。やむなく宣旨（天皇の命令書）を示して家宅搜索しても親繁王は見つからない。あきらめない検非違使たちは京中を探索し、強盗団の一味をもう一人を捕まえ、親繁王が親王邸に確かにいることを確認、そして盗品のありかを聞き出した。さらに親王の家をずっと張り込んでいた者が親王邸から出てきた親繁王を捕え身柄を確保した。息子をかばった式明親王が罰せられたのはいうまでもない。

この現代の「刑事ドラマ」を見るような記事は平安後期の歴史書「扶桑略記」にある。このついでに筆者が気になることを述べれば、盗賊の一人である清和天皇の曾孫の父親は源蕃基であり、同じ清和天皇の血筋である源満仲とは義兄弟であり親しい関係であった。ひよっとしたら父親に連れられて満仲邸によく来ていて邸内の事情に詳しかったかもしれない。実をいうと源満仲邸はもう一回、盗賊

団に襲われている。十二年後の天延元年（九七三）四月二十三日のことである。この時はさすがに強盗団も作戦を練ったか、かなりの人数で満仲邸をぐるりと囲み、邸内に火を投げ込み混乱に乗じて押し入ろうとした。合戦といつてもよい状況だったのだろう。たまたま邸内にいた越後守の宮道弘氏が賊との戦いの最中に盗人の放った矢に当り亡くなった。余談ながら宮道弘氏は藤原為信の妻の甥であり、藤原為信と宮道一族出身の妻との間にできた娘が藤原為時と結婚して生まれた子供が紫式部である。この日、盗賊団が放った火は大火となり四百軒ほどの家を焼亡させた。このことは道綱の母が書いた「蜻蛉日記」にも記事が見える。

次は以前に紹介した事件だが、花山天皇の女王（皇女であるが内親王となっていない女性のこと）が強盗に殺害され路頭で死に死体が犬に食われるということがあった。この事件を素材として『今昔物語』巻二十九第八に「下野守為元の家に入りし強盗の語」という話が書かれている。以下は「今昔」の要約である。ある年の暮れに為元の家に強盗が入った。すると隣人が大声で騒いだので「包囲された」と思った盗賊は大あわてで身分の高そうな女房を質に取って馬で逃げ出した。しかし、追手が迫って来たために「女房の御衣（上半身の衣類）」を引剥して「全力で逃走する。寒い冬の夜、袴一つの裸姿で京の路上に放り出された女

房は川に落ちながらも助けを求め、誰の助けもえられず「遂に死にければ犬に食はれ」「朝に見ければ、いと長き髪と赤き頭」と紅の袴と、切々にてぞ凍の中にありける」という凄惨なことになった。

この女房、つまり花山天皇の女王は事件の起きた万寿元年（一〇二四）においては太皇太后となっていた上東門院、つまり藤原道長の娘である彰子に仕えていた。皇女が女房となつて出仕するのはきわめて稀なことであるが、母親の身分が低く我が子と認知するのを花山天皇が拒否したからである。為元は花山院（天皇が退位すると「院」と呼ばれる。）に仕えていたので、女房は彼の邸宅にたまたまいたのかもしれない。

この事件は発生当初から強盗が目的ではなく「女王を路頭にひき出して殺す」のが目的だったのだと噂された。つまり、強盗に見せかけた殺人だといふのである。仮にも皇女を死なせた重大事件とあつて犯人を捕えた者には莫大な恩賞を与えるという宣言が出された。そのため検非違使たちの懸命な探索が続けられ、三ヶ月後に犯人一味の一人が捕えられた。犯人を捕えた大殊勲の右衛門尉 平時通は道長や頼道から直接褒めの言葉を賜り一躍有名となる。きつとたいした褒美をいただけるだろうと人々は噂しあつた。しかし、犯人を拷問しているうちに意外な事実が浮かんできた。花山院の女王を

殺害することを自分たちに命じたのは

「荒三位」（粗暴な三位）という異名もつ藤原道雅だといふのである。事件はとにかくに重大な局面を迎えた。藤原道雅は従三位左近衛府中将伊予権守であり、三十四才のれつきとした公卿である。しかも祖父は関白藤原道隆、父親は内大臣伊周、叔母は一条天皇の皇后定子。どこをとつても貴族の中でも最高級の貴族といつてもよかつた。道長と頼通は驚嘆し、そして、これをどう收拾するかで頭をかかえた。そうこうするうちにまたまた意外なことが起きた。犯人一味の首領が自首してきたのである。それからどうなつたか。それはまったく不明であり、何の史料も記録もない。道雅が黒幕だとすると、捜査の打ち切りをねらつて道雅が犯人を立て出頭させたかもしれない。少し前のヤクザ映画でよく見た手法である。結果からいふと道雅には何もお咎めはなく無事にその後の人生を送つていく。公卿の中から犯人を出してはいけないと、おそらくうやむやのうちに片づけられたのだろう。今や悩ましい存在となつた平時通には何の恩賞もなかつた。ただし、かなり時間がたつてから時通は五位に叙せられている（貴族の一員となる位階が与えられた）が、そのかわりに勤めていた役所は退職となつた。ややこしい者は切ることにしたのだが、少しばかりの恩賞は与えたのである。世間の目がうるさかつたからであらう。

この事件は殺人が目的であり強盗は隠れ蓑であるが、最高級の貴族が強盗といふ手段を用いている点に注目したい。やろうと思えば摂関家クラスの人間でも強盗・殺人犯になりえたのである。

ところで、盗賊・強盗たちの記事を読んでいくと目に付くのは「案内を知る者」という言葉である。「案内を知る者」とは被害にあつた家の関係者や事情をよく知る者ということである。

たとえば治安三年（一〇三三）、内裏の後涼殿（清涼殿の後にある建物）の女房たちの詰所の簾に火を包んで置き、その煙で「火事だ」と大騒ぎしている間に衣類を取ろうとした事件が起きた。火は蔵人所の役人が消し止め、女房の詰所に入った二人が捕えられている。また、万寿元年（一〇二四）、藤原実資の東隣の家である故中原致行宅に強盗が入り、致行の母尼と女二人の衣服をとつたが、その強盗を捕えると致行宅の事件当日に宿直をしていた男であつた。このような状況だから、当時の貴族たちは隣家の雑色や自家の従者には強い警戒心を持つていた。「従者とても心許すべき者に非ず。いはんや疎からむ者のさる心あらむは、此れ必ず疑ふべきことなり。（従者といつても心を許すべきではない。ましてや、見知らぬ者には悪い心があるかも知れぬと必ず疑つてかかるべきだ）。この言葉は強盗に押し入れられた貴族を書いた話（今昔物語）巻二十九の第七）の末尾にみえる

作者の評である。

こうした「案内を知る者」による犯罪の究極の形態は警察機関である検非違使が盗人に変身する場合である。長元元年（一〇二八）、後三条天皇の母である禎子内親王の居所に盗人が入つたが、犯人は内親王を守るはずである検非違使の平成光であつた。

また、検非違使による犯罪例を今一つ。検非違使が盗人を捕えるが一人の検非違使が「疑わしいことがある」と盗人の家に入る。その検非違使が出てくると袴の裾が「ふくよか」であつた。他の検非違使が「怪しと思ひ」、調べてみるとその袴の括り紐から白糸が二、三〇ばかりバタバタと落ちた。この検非違使の行いを「極めてあさましきことなり」と「今昔物語」（巻二十九第十五）では評している。

最後に盗賊たちと襲撃を受けた側との戦いぶりを書いておきたい。結論を先回りして言えば盗賊との戦いはまさしく「合戦」そのものであつた。

承平元年（九三二）十二月に群盗が藤原菅根の邸宅に立て籠もつた。検非違使や役人たちが終夜にわたり取り囲み、夜明け頃に群盗は「弓矢を奉り降を請う」てきたので、すべて捕えられた。群盗は弓矢に堪能であり弓矢は群盗にとつて自らの象徴であり、弓矢を差し出して降伏することの意志を示したのである。これは関東の武士たちが反乱を起こし降伏するときの形とまったく同じである。群盗

や盗賊の弓矢による戦闘行為は数限りなくあるが、そのさまは紛れもなく「合戦」そのものといつてよい。

長徳三年(九九七)、群盗三〇余人が平惟仲(清少納言が仕えた皇后定子の出産のために家を提供した平生昌^{なりまさ})の兄。定子は出産直後に生昌邸で崩御した)の家に入り、邸宅に側にある建物である西対^{にしむたい}から侵入した。そして盗賊たちは中央の寝殿に入ろうとする。そこで人々が弓矢で戦って押し返し群盗は散り散りに逃げていった。同じ長徳三年、住人から盗人たちがいると知らせが来たので、檢非違使たちは「弓箭を帯びて馳せ向かう」。これも同年のことだが、強盗が大蔵省の三等官の宅に入る。人々と「相戦う間」に強盗は火を放ち逃亡する。

強盗・群盗を撃退・捕縛することは、間違ひなく合戦に展開した。先ほど書いたように平安京ではすべての身分が盗人になり得るので、任意の住人が思わぬ合戦に巻き込まれたり、参加したりしうるのである。冒頭の少内記光遠の災難はその一環であり、プロの戦闘集団の一員でもなかった一般の住人がとった集団防衛の手段は「ののしる(大声でさわぐ)」ことであつた。戦闘の手段も能力もない無力な人々が生き延びるための知恵の一つには違ひない。

【補足】

1 「偷盗」のこと

平安時代の盗賊について興味を持たれた方は芥川

龍之介の小説「偷盗」を一読されたい。また、この「偷盗」のもととなった『古昔物語』巻一十九第三「人に知られざる女盗人の語」は芥川龍之介の小説より秀逸な出来映えを示す作品であると信ずる。これも合わせて御一読を。

2 藤原道雅のこと

荒三位こと藤原道雅は『古昔物語』の研究者の間では万寿元年(一〇二四)に起きた花山院主女殺害事件の重要参考人として有名であるが、百人一首のファンにとっては齋宮との密通事件を起した張本人として有名である。事件は長和五年(一〇一六)九月に起きた。道雅が伊勢齋宮を退下し(役目を終えること)帰京した当子内親王と密通したのである。これを知った内親王の父三三院の怒りに触れて彼は勅勘をこうむつたという。また、仲を裂かれた当子内親王は翌寛元元年(一〇一七)に病により出家し、その六年後に亡くなった。百人一首には道雅が当子内親王に贈つた歌が採られている。

いまはただ思ひ絶えなむとばかりを
人づつてならで言ふよしもかな

「百人一首」 六三番

歌の意は「今となつては、きつぱりあきらめよう、とだけ人をつてではなく直接伝える方法があればよいのになあ」というもの。この歌を内親王の御所の高欄にそつと結びつけたという伝説がある。

中関日藤原道隆の孫であり道隆に甘やかされて育てられたが、関日道隆の死、そして父である伊周が花山院に矢を射かけたことから始まった中関日家の没落などを見つづつ成長したことから来るのだろうか。知恵も才能もある甘えん坊のやんちゃ坊主が思い通り行かない鬱屈から暴れまくっているという風にか筆者には見えない。

我がおくのほそ道の旅 (4)

成瀬 和之

芭蕉と曾良は、最上川を酒田まで一気に下らず、途中で出羽三山に詣りました。出羽三山とは羽黒山、月山、湯殿山の三つの山です。庄内平野と日本海をはるかに見たす修験道の聖地です。月山に登るときに、『雲や霧の立ちこめる山のなか、氷や雪を踏んで登ること三十キロあまり、いよいよ太陽や月の通路にある雲の関所に入るのかと疑わしくなるほどだ』と本文で表現しています。つまり天の入り口に入ったかのようなのです。

『涼しさやほの三か月の羽黒山
(なんとも涼しい。夕闇のなかで
黒々と静まる羽黒山の上に、ほのか
に三日月の淡い姿が浮かんで見え
る。)』

『雲の峰幾つ崩れて月の山
(夏空に高くそびえる雲の峰、その
入道雲が、夕べとともに、いくつも
次々に崩れていつて、やがて三日月
の光のなかに、出羽三山の最高峰、
月山が姿を現した。)』

などと芭蕉は詠んでいます。ここは先を急ぎます。(なお、今回から現代語訳をビギナズ・クラシックス 日本古典 おくのほそ道(全) 角川文庫に変更しました。)

立石寺も出羽三山も芭蕉と宇宙を結ぶ「山」ですが、もう一つ、芭蕉と宇宙を結ぶのが「海」です。「おくのほそ道」後

半に入って芭蕉と曾良が初めて海を見たのは最上川河口の酒田でした。二人はここで晩夏の日本海に沈む巨大な夕日を眺めました。

『羽黒山を出発して、鶴が岡(鶴岡市)の城下町に入り、長山重行という武士(庄内藩士)に迎えられ、彼の屋敷で、連句一卷を作った。因司左吉もいっしょに、この町まで私たちを送ってきた。鶴が岡からは川船に乗って、酒田の港に下った。酒田では淵庵不玉という医者の方に泊まった。

あつみ山や吹浦かけて夕涼み
(南は、はるか温海山^{あつみやま}のあたりから、北は遠く吹浦へかけて、日本海を一望のもとに見渡しながら、海上に舟を浮かべて夕涼みを楽しんだ。)

『暑き日を海に入れたり最上川』

(ビギナズ・クラシックス)
『暑き日を』の句ははじめ次の形でした。
涼しさや海に入れたる最上川

日本海へ流れ入る最上川を眺めていると、なんと涼しいことかというのです。

この句は「海に入たる最上川」が現実「涼しさや」は心の世界ですから一応は古池型の句です。しかし「涼しさや」は心の世界といつても何とも弱く、風の涼しさ以上のものが湧きあがってきません。立石寺の句の「閑さや」のような宇宙の静かさを感じさせるまでにはゆかない。

そこが芭蕉も不満だったはずですが、

そこで、次のように直します。

涼しさを海に入たり最上川

しかし芭蕉はこれでも飽き足らず、最終的には次の形にしました。

暑き日を海にいれたり最上川

「涼しさを」を「暑き日を」にあらためています。これは、前回のもう一つの最上川の句「さみだれをあつめてすゞし」を「早し」にしたのと同じ手ですが、これによってこの句はどっしりとした雄大な句に生まれ変わりました。

「暑き日」は暑い一日という意味ですが、その背後に暑い一日を照らしつづけ、水平線のかなたに沈んでいく巨大な太陽が浮かびあがります。日本語の「日」には一日と太陽という二つの意味があるからです。この「日」という一字の働きでこの句は、最上川は暑い一日を日本海に流しているという意味と、最上川が太陽を日本海に沈めているという二つの意味をもつことになりました。

最上川は、関西では見るのできないような圧倒的な迫力をもつ、みちのくの大川です。「巨大な太陽が圧倒的な大河そして日本海と一体になる」というこの雄大な世界は、芭蕉と同じ関西人である私の心に、利根川などの大河もある関東地方の人々よりも、なお一層迫ってくるように思われます。

月山の三十キロをはじめとして出羽の三つの山に登った芭蕉の旅は、半端な物

見遊山の旅ではありませんでしたが、私の旅は、物見遊山も兼ねています。羽黒山の五重塔・杉並木・石段は観光で訪れても雰囲気のある素敵なところです。月山ビジターセンターまで行きましたが、出羽三山の自然景観や地形、気候の特色、動植物の生態などをわかりやすく展示・解説し、自然と触れ合うきっかけとなる施設です。鶴岡も酒田も、それぞれ一日かけて散策するに値する風情のある、歴史と文化の街です。

さて、次々回には芭蕉と宇宙を結んだもう一つの海の句が登場します。そこへゆく前に芭蕉と曾良は象潟を訪れました。象潟は太平洋側の松島と好対照をなす多島の入り江でした。次回は私のお気に入りのみちのく、「おくのほそ道」最北端の象潟です。

〈訂正〉前回、二度目に出てくる「坂田」は、一度目と同じ「酒田」でした。お詫びして訂正いたします。

参考図書・NHKテキスト「おくのほそ道」
(長谷川権)



米国紀行 (4)

河原林 成行

首都ワシントン探訪(続)

一九九七年五月二日

今回は、今(二〇一七年三月)となつては昨年の大統領選挙におけるドナルド・トランプ新大統領(共和党)の出現によって、米国そのものの世界における位置付けがチョット変わってきたようにも見え、当時思っていたままのことを書いてみます。

世界中のグローバル化を推進してきた米国があまりにも頑張りすぎて息切れを起こしてきたようにも見えます。その兆候は、私が現役のところから既に、自動車、情報・通信、ソフトウェア技術や知的財産等の分野における政策、産業、技術に具体的に表れ始めていたことも多々あった(ある)ようにも思えます。マ、それはとも角「あのワシントンDC」の第一印象です。

ここでは、上や周りを見渡しているうち、ムックリと起き上がった巨大な恐竜の姿が徐々に見えてきて、「あれが目で、あれが鼻で…」とその姿、形を驚きを持って確認し、「こいつは何処から来て、今まで何をしてくいて、これから何をやるんだらう?」と見つめてゆく浅はかな洞察や感慨をお送りします。何といつてもここは嬉れし恥ずかし、「世界の中心の花のワシントンDC散歩」

五月二日(金)、本当によく晴れました。

五月晴れとはこういう日のためにある言葉かと思うほどに良い天気です。芝生や木々の新緑に覆われた公園では、カルガモやマガモがヨチヨチ歩いていきます。若い人あるいは年配の人がジョギングしてきます。でも、我々はカルガモやマガモのいる公園にいたるのではなく、この国の、いや世界の首都のワシントンDCにいたるハズなのです。

我が七才児は鳥がとても好きで、いろんな鳥の図鑑や本を持っていて、ほとんどの鳥の名前や特徴を知っています。彼を連れてきたらキツト喜びます。なにしろ、人間を怖がらず、すぐ手でエサをやったり、さわったりできるのですから。ちなみに、彼は昨日の運動会の五〇メートル走で一等になり、ご満悦です。

いや、今、そんなことはどうでもいいのです。自分達が何処にいるかが問題なのです。我々は、カルガモやマガモを見るために、はるばる米国まで来たのではないのです。

少し上り坂を歩いていくと、パアッと急に辺りの視界が開け、世界が一変しました。抜けるような青空の下、その青空へ向かって一直線にそびえる一〇〇メートルを超える尖塔が、目の前に飛び込んできました。周囲をいくつもの星条旗でグルリと取り囲まれています。

平日の金曜日だというのに、たくさんの方がいます。これだけの人を見るのも久しぶりです。この人々を見てやつと、「ワシントンDCへ来たんだな」という実感がし、安心もしました。首都だとい

うのに誰もいないゴーストタウンの不安を味わった我々には何よりの光景でした。その尖塔は、大理石でできた、ワシントン広場のちょうど真ん中の小高い丘に位置するワシントンDCの象徴の「ワシントン記念塔 (The Washington monument)」だったのです。ほぼてっぺんまで登れるのですが(歩いて)、早朝六時頃から行列ができるそうです。私は、腹ペコと行列待ちを理由に登るのを止めました。

今にして思うと、登っていれば本当に、ワシントンDCが海岸部まで含めて一望できていたと思います。今度来た時は、登ります。

小高い丘の上で周囲が一望できることでもあります、「一つ見つけると続いて見つける」ということは何事に依らず、よくあることです。一番星が見つければ、二番、三番：と見つかっていきます。マツタケでもそうです。一本見つければ、その同心円状に点々と見つかるのです。最初の一本を見つけたのが難しいのです。先ず、白亜の独特の見慣れたドーム形の国会議事堂が目飛び込んできます。

その手前には、各省庁の建物と思われる数々の巨大なビル群。振り替えれば、あのポトマック川から引き込んだ池の向こう岸に、これも白亜の第三代大統領で「独立宣言」の起草者のトーマス・ジェファソン記念館等々が「これでもか」とばかりに展開します。この時になって、「ヨリザさんもさすがに、うまい位置で降ろしてくれたものだ」と思いました。お目当てのホワイトハウスはまだ見つ

かりませんが、ワシントンDCにいることだけは確かです。それが分かると、急に空腹感が襲ってきました。でも、この辺りは公園の中なので、街の中のような気の利いたレストランか喫茶店のようなものはありません。かろうじて、黒人の「出店」があるのみです。結構賑わっている其の「出店」へ入り、ペプシコーラとサンドイッチで一息つき、次の作戦を考えます。

観光地図すら持たない我々としては、この広大な広場を歩いて回る訳にも行かず、結局、この周辺を二巡する独特の二両連結の観光バスを利用することにしました。

このバスは、一日一人十二ドルで、何時間でも、何回でも、何処でも乗り降り自由ということでした。多くは、黒人の運転手と車掌のペアで運行されているようです。

我々も早速、バス乗場へ行き、乗車券を買って乗り込みます。運転手は中年の黒人女性、車掌兼ガイドは黒人男性のコンビでした。このバスは、モール↓各種官庁↓ワシントン記念塔↓トーマス・ジェファソン、アブラハム・リンカーン、ジョン・F・ケネディ等の記念館↓(ポトマック川を渡って)↓アーリントン国立墓地↓ホワイトハウス↓国会議事堂↓各種官庁↓モールと周回するのです。非常に広大なエリアです。

ワシントンDCと聞いて先ず私が連想するのは、ホワイトハウスです。そして、最も行きたい場所は、かつて多感な青少年であった我々に言葉で言い表せないほ

どの大きなインパクトを与えた、あの第三十五代大統領のジョン・Fケネディが自分の唯一・最大の失敗といわれているベトナム戦争のおびただしい犠牲者とともに眠るアーリントン国立墓地なのです。

彼は、世界が米ソ両国の冷戦構造の時代にあって、ソ連の首相のフルシチョフとなんとかして対話を持とうとしたり、緊急時に備えてホットラインを開設し、何とか最悪事態を避けようとしたりする姿は、たとえ多少はポーズもあつたにしても、周囲に大きな感銘を与えました。

本当に当時は、いつ、何処から核ミサイルが発射されてもおかしくない時代背景がありました。毎日の新聞がマジで心配でした。「第三次世界大戦勃発！」という見出し記事が…。

当時は何事においても米ソ両国の競争でした。政治、経済、文化、科学技術等々。特に彼は、科学技術、とりわけ人類初の有人衛星でソ連のガガーリン少佐に「地球は青かった」と言わせしめてしまった宇宙の分野に力を入れ、今日のNASAを創ります。

そしてアポロ計画を発表し、「米国は、一九六〇年代に人類を月へ送る」と公言し、その言葉通り一九六九年七月にアポロ十一号を月へ無事に送り、アームストロング船長に「私のこの一歩は小さいが、人類にとっては大きな一歩である」と言わしめます。

このような胸踊る出来事も我々に夢と希望を与えてくれました。今も、ニューヨークに「ジョン・Fケネデ

イ国際空港」、フロリダのNASAの宇宙基地に「ケープ・ケネディ」として、宇宙関係の地名にその名を残しています。

このように何事も華やかだっただけに(ジャックリーヌ夫人も含めて)、最期もあつけないほど華やかでした。真夏の夜の一発の打ち上げ花火のようなものです。一九六四年に東京オリンピックが開かれるのですが、その前年の一九六三年にそれをTVで衛星中継するためのリハールとして、テキサス州ダラスから送られてきた映像は、オーブンカーで夫人とともに行進中の彼が、いまだに真犯人の分からない誰かに狙撃されるシーンでした。

その後、間もなく発売された彼の有能な秘書が書いた(と、その本の帯には書いてありました)「ケネディの道」という本を読んで更に懂れました。この時に、

ただ漠然とはありますが、私も「科学者になりたい」と子供心に思ったものでした。その本も無くしてしまい、時々思い出しては探すのですが、見当たりません。もし、どこかで見かけたら教えて下さい。毎度ながら、またまた大きく話が外れました。元へ戻します。

そんなこんなでアーリントンの彼の墓へ参り、彼が一時住んでいた「ザ・ホワイトハウス」へ寄るのが目的でしたが、アーリントンの方は工事中で入れませんでした。今度来る時は必ず線香を上げさせてもらいます。

観光バスに乗ったお陰で「ザ・ホワイトハウス」もすぐに見つかりましたが、外から柵越しにその美しい外観を見てヨシ

としました。中庭に軍か警察か分かりませんが、大きな目のヘリコプターがとめてあるのも「ザ・ホワイトハウス」らしいところでしょうか。この辺りの上空では、何回かヘリコプターの爆音が聞こえます。時間がなくて、皆さんのよく行かれる「スミソニアン博物館／美術館」、国会議事堂やNASAなどへは行けませんでした。「夜のワシントン」も見ることが出来ませんでした。これは、とても残念です。また、出直すことにします。

また、いろんな省庁の建物の中で、農務省の建物が際立って大きかったのが印象的で、非常に意外でした。やはり、南北戦争が起るくらいに、この国は農業国でもあるのです。

このようなことを、それを見下ろす商務省の大きく広い石段に座りながら思いました。

ところで、えらいことに気がつきました。ネディーンの夫のジョン・R・アッタマンと私の憧れるジョン・F・ケネディとは同じジョンではないですか。これから、ジョン様と呼ぶことにします。間違っても呼び捨てなんぞはトンデモナイ。エライ名前を付けてくれたものやなア。彼も重い十字架を背負って苦勞してるやなア…。

ワシントンDCからの視線
ここでは、公園の中に首都があるのか、首都の中に公園があるのか分からないほどうまく調和しています。人工の臭いのプンプンするニューヨークのセントラルパークとは、好対照です。この国の自然

な視線の方向について、感じたままに触れてみたいと思います。

「ザ・ホワイトハウス」の隣の商務省の大きく広い石段に座って、しばしばとしてしていると、左手には人影の薄い、ズーツと続く官庁街、中央にはワシントン記念塔越しにトーマス・ジェファソン記念館、さらにポトマック川を越えてアーリントン国立墓地、右手には国務省や内務省などの大パノラマが広がって見えます。どうもここは一等地のように思えます。

日中の忙しい時間帯だというのに、この石段を利用する人は誰もいません。「ここを出入りする人達、特にこの国の官僚や政治家はどんなことを思っているのだろうか」という思いがします。彼らには、こうやって座って、大事な時間にボくとするほど暇はないでしょうが…。霞ヶ関だったら、蹴つ飛ばされそうな気がします。

でも、こうやってこの場に座ってみて初めて（立っていてもいいのですが）、「ザ・ホワイトハウス」や国会議事堂や主要官庁のほとんどが、大西洋の向こうにある、移り住むまでの「本国」であり、「親」でもあるヨーロッパを向いているのがよく分かります。

そういえば、あの独立戦争で本国のイギリスに勝ってしまったのはいいのですが、さて自分達でこの国を治めていくのに何を拠り所にし、どうやっていったらよいかがよく分からず、結局、当時のロッキの思想の影響を受けたフランスの法律を真似たというのは、有名な話です。

その一つが、白亜のトーマス・ジェフ

ソン記念館の中の四面に、ビッシリと刻まれた生命・自由の尊重、幸福の追求を基本思想とする一七七六年の独立宣言なのでしよう。ここへ来るまでは独立宣言なんて、教科書で習う程度の、我々とは縁のない遠い世界の話だと思っていたが、ここへ来て、直に触れてみると、とても身近なものに思えます。

言ってみれば「お互い、命を大事にして、自由に、幸せに暮らしましょう」というダケですからネ。そのダケが保証されないのが戦争まで起こすのですから、いかに当時は大変な時代だったかが、よく伝わってきます。今の時代の、しかも日本に生を受けてよかったと思えました。四面の文章は全部、トーマス・ジェファソンの銅像とともに我がミソルタール(Missouri)に納めました。また、何故かこの記念館の前で、一枚五〇ドルのワシントンDCのロゴ入りのTシャツを二枚も土産に買ってしまいました。

ついでに、その刻まれた起草文によると、起草はトーマス・ジェファソンが三才の時とありますから、この国では当時から進取の気性に富む有能な若い人を躊躇なく登用する気風とその必要性があったようです。

日本でも、明治維新の頃はそうだったのでしょうか、一旦、事が成就してしまふとそのスピリッツはどっかへ飛んでゆき、あとは保守化だけが残るのはどうしてでしょう？

まあそれはともかく、やはり、米国といえども「本国」には頭が上がない面もある

ようです。米国の弱点(巨大な恐竜の弱点、アキレス腱)をここ首都・ワシントンDCで発見したような気がします。だからどうこういう訳ではないのですが。

アメリカ人の深層部にはマザーコンプレックスにも似たこのような心理があるのかも知れません。特に、当時大変よくしてくれたフランスに対しては…。

母親には頭の上がないヤンチャ坊主のようなものです。イヤ、誰とは言いません。お互い心当たりなしとは言えませんなア。やっぱり、母は強しですワ。

なにしろ、ヨーロッパから見ると、米国はいまだに「新大陸(未開の地の意味も含めて)」ですからネ。母国から移民した同じ思いの人たちがそれぞれに州を作り、それらが集まって形成している国ですからね。

このように、ここ「商務省の石段」に座ってボくとしていると、いろんな事が思われてきます。当たっていることもあろうでしょうし、残念ながらハズレていることもあると思います。でも、アメリカ人と同じ視点からものを見られますし、見てしまいます。

我々日本人は、米国は太平洋を挟んだだけの、隣の国とっています。ところが、ここ米国の「商務省の石段」から見る日本は、後ろを振り向いてロッキ山脈やカリフォルニアを越えて、さらに太平洋を渡った隣の国ではなくて、真つ正面に広がる大西洋を越えた本国の向こうの、中近東やインドやヒマラヤ山脈や中国のさらに向こうの、遙かに遠い国に見

えます。ヒマラヤ山脈の隙間からやっと富士山が見えそうです。百歩譲っても隣の国には残念ながらみえません。

ザ・ホワイトハウス、国会議事堂や各種官庁などからも同じように見えるはずですが、それは、ヨーロッパ人が日本を見るのと同じで、極東の国のように見えます。

東京から、日本海を隔てた隣国の韓国を見るのに、むしろ太平洋を隔てた米国の方が近く見えるのに似ています。今では、こんな見方をするアメリカ人は少ないとは思いますが、「商務省の石段」からはそう見る方が自然なような気がします。首都が西部のカリフォルニアにでも移ればまた別ですが。

ちなみに、この国の首都は、ご存知のとおり、一七七六年に独立をして最初の一年は、ニューヨークでした。次は、ネディーンの故郷で、隣のメリーランド州の現州都で、多くの大統領を輩出した名門・海軍兵学校があり、本国のアン王女から名前をもらったアナポリスでした。そこが手狭になって、ここへ移ってきたそうです。ご存知の通り、初代大統領ワシントンとこの新大陸の発見者コロンプスの名前を付けて、州とは独立のワシントン特別区(コロンビア区)(Washington, the District of Columbia)として。

また、我々日本人として忘れられないのが、歴史の授業で習った一八五三年の、ペリー提督率いる黒船の浦賀への来訪です。ここから浦賀までどんなルートで行ったのでしょうか？ 当時まだ未開の地で、メキシコから譲ってもらったばかりのカ

リフォルニア地区まで行き、そこから船で行ったのでしょうか？

当時だったら未開の西部・カリフォルニアへ行くだけでも大変なコトだったろうと思います。道路はもちろん、電話などもなかったでしょうしネ。

港や造船技術などの文明・文化は、本国に近い大西洋岸の東部にやっとあった程度だと思えます。東部のどこかの港から、大西洋へアフリカへインド洋へ太平洋を経て、極東の国・日本へ行ったのでしょうか、キット。どんな地図や海洋図が当時あったのでしょうか？ 今回の米国旅行に、ネディーンが我々のために描いてくれたようなものだったのでしょうか？？？ 往復だけでも大変な一大事業だったと思えます。本当にどうやって行ったのでしょうか。ご存知なら、また教えて下さい。このようなことは、「ドウデモヨイコト」として、今も学校では教えてくれないようです。

米国には日本という通産省がありませんので、通産省の機能も含めて、通商(貿易)に関しては、この商務省がやっていたはずですが。当時はどう呼んでいたか知りませんが。ペリーはこの石段を歩いたのでしょうか？ いや、そもそもこの建物はあったのでしょうか？ どんな思いで、どんな役割で、誰と、そして、どんな情報に基づいて日本へ行ったのでしょうか？ 通商によって巨万の富が得られるとでも思っていたのでしょうか？ また、富があったとしてもアッサリと日本が渡すとも思っていたのでしょうか？

いくら独立戦争に勝って士気が上がり、領土も元の東部十三州からドンドン拡大し、増えているとは言っても…。

このようなことを、この国だけでなく、世界の経済を取り仕切る商務省の石段でボンヤリと思っていました。毎度ながら、またも長い横道へ入ってしまいました。

多少の疲れもあって、二人で石段に腰掛けて休んでいるうちに気が付けばもう四時近くです。ここまで来たのはいいのですが、ここで何をして、何時頃に、どうやって帰るかということ二人とも全然計画していないのに今やっと気が付き、「どうしよう？」という情けないことになってしまいました。

ただ、ネディーンの結婚式の場所のポルチモアがたまたまワシントンDCに近いかからフラリと寄ってみただけなので、でも結果的には、ここへ来てよかつたと思えます。何よりも、私の原点の一つでもあるジョン・F・ケネディがいた場所に自分を置くことができ、日常の世界の中で忙しさという名目にかまけて、「眠り込んでいた自分」というものを出すことが出来ました。ネディーンのお陰です。

この原点を形成したのは、今にして思うと、中学へ高校の時代でした。ちょうど今、不肖、長男(高二)と長女(中二)がその時代なのです。付かず離れず、大事に見守ってやらねばと思います(スグ忘れそうですが)。またまた得意の「奥の横道」へ外れそうです。

「とりあえず、観光バスに乗って、ユニ

オン駅まで行こう」ということにします。

そこまで行けば、繁華街か何かがあるやろという頼りない方針で、とにかく帰る方向へ向かいます。そういえば、藤田さんのご期待の飲み屋街や盛り場とは言いませんが、繁華街などが何処にあるのか分かりません。今度来る時は、その辺も大きなポイントです。今回は残念ながら…。

終点のユニオン駅で観光バスを降り、少し行くとユニオン駅を中心に来たと思われるちよつとしたショッピング街がありました。三々四階建ての駅ビルです。ウインドウ・ショッピングをちよつとしますが、我が奥サンは特に欲しいものがないのか、言っても買えないのをよく知っているのか、ただ見て回るだけです。喫茶店でも入って少しユックリしたいのですが、適当な店がありません。店先にあるメニューも我々にはちよつとボリュームがあり過ぎます。

結局、一階のセルフサービスのカフェテラスに到着しました。若い黒人女性が二人で、切り盛りしています。高校生くらいです。この国では、早く社会へ出て働き、金儲けをするというのも日本とはチョット違う価値観でやってるようです。勉強、スポーツ、金儲け等々、この国では何事につけ、半端じゃない社会構造があるようです。アメリカンドリームがまだまだ生き残っているのでしょうか？ プロ意識が浸透しており、何をやっていてもプライドを持ってやっているように見えます。「これは私の仕事だ」とネ。日本流の「甘えの構造」は通用しないよ

うです。「あなたが駄目でも外に代わりは一杯いるよ」とネ。考えようによつてはコワイ国です。

大き目の紙コップのアメリカンコーヒーとパンを食べて少し元気が出てきたところで、帰りは、ジョンのお勧めの、この国では珍しい鉄道 (MARC Train) を利用することにしました。ユニオン駅からは、フィラデルフィア經由ニューヨーク方面行きとペンシルバニア州のピッツバーグ方面行きの二路線が出ているようです。いずれもほぼ三十分一本の割合で出ているようです。

切符の自動販売機などはなく、まるで飛行場で搭乗手続きをするみたいに切符を買います。デップリとしたオバちゃんに「ペン駅まで」と言つて切符を買います。五・七ドル×二人でした。明日はネディーンの結婚式なので、早めに帰ることにしました。今だと、一七時二十分発の間に合います。

映画やTVでは見たことがあります、外国の鉄道に乗るのは初めてです。

記念写真を撮つて乗り込みます。何か登山電車のような気がします。日本の通勤電車とはまったくイメージが違います。予想に反して時刻(ダイヤ)の方は比較的守られているようです。列車はユックリ走り、約五十分かけて、ボルチモアとペンシルバニア州との境にあるペン駅に十八時十分は無事到着しました。あまりにもダイヤ通りスムーズに着いたので、駅の中で少し時間をつぶしたいのですが、構内には、黒人少女が売子をする

花車とキオスクしかありません。花車では、花や女の子が欲しがりそうなピアスやキャンディを売っています。とても可愛い女の子だったので何か買いたかったのですが、妻も私も顔を見合わせただけで、結局、何も買いませんでした。可愛かったのになア。

こんなところにキオスクがあるとはまったく予想外でした。ユニオン駅にはなかったと思います。店先に並んでいるものは、日本のキオスクとほとんど同じです。

新聞、雑誌、菓子類や飲み物等々です。ただ違うのは、日本でも売っているペントハウス誌やプレイボーイ誌が無修正だということ。あくまで教育的にどんなもんかをチェックするために、個人的な好奇心のためには決してなく「少ない訳がまし、見苦しいものがあります」、ペントハウス誌を保護者の許可を得て買ってみました。空けてビックリ玉手箱です。今度お会いする時には、教育資料としてお持ちします。妻が捨てていなければ……

外はもう少し暗くなつてきています。タクシー乗場には、行列ができていました。米国に着いた初日のボルチモア・ワシントン国際空港↓ザ・コンフォート・インの悪しき前例がありますので、今度のイエローキャブの運転手にはシッカリと行き先を告げ、常宿のザ・コンフォート・インにスナナリ着きました。今度の運転手はここを知っていたようです。チップなしで、一十二ドル也。

一八六七年

大江雉鬼

十年一昔という言葉もあるが、世の中の移り変わりが激しければ十年も経てば遠い昔と感ずってしまうのは極めて普通の感覚である。それでは十年ではなく、五十年単位で考えるところなるだろう。太古の昔でも呼ばばいいのか、感覚的には年表にも記される「歴史」として受け取られても不思議ではない。こういう話を始めたのは、先日、京都府庁の近くを通つた時のこと「そういえば、あれから百五十年しか経っていないんだ」という思いがふと閃いたからである。「あれから」なんて言い方をした日には、直接経験を話題にしているかのようだが、百五十年だから、その範囲外であるのはいまでもない。だが、直接経験の範囲に含まれないがゆえに、遙か遠い彼方の出来事のように捉えがちな事象が、わずか百五十年前であるということに気づいて不思議な感慨に囚われてしまったのである。

その百五十年前の出来事とは何か。今年が二〇一七年なのだから計算すれば自明のこと、一八六七年の出来事である。持つて回つた言い方をせずとも、この数字を突きつけられると、日本人であれば誰しも江戸幕府終焉の年であることに気づく。バブルの時代や全共闘の時代が遠い昔であるように感じられるようになったというのなら、それは世相の推移がも

たらず感覚である。しかし、それに対して江戸時代はどうかと問われると、根本的に範疇が異なる。感覚的に近いものの遠いものを論じる対象ではなく、歴史資料の上でしか知り得ない、言わば別次元の世界であるはずだ。それなのに、そうした江戸時代と呼ばれる世の中、鬚を結つた二本差しが肩で風切る世界がほんのわずか百五十年前までは現実に存在していたのだということを知つて妙な気分になつてしまつたのである。

日本史全体を俯瞰すれば、江戸時代と明治時代の間には大きな溝を設けて考えるのは一般的な傾向だろう。前者を近世といい、後者を近代と呼ぶなどがその典型である(場合によっては明治以降を近代といい、江戸時代までを前近代と十把一絡げにすることもある)。時間は常に均等の速度で進んでいるのだから、一八六七年に最初から大きな溝が存在していたわけではなく、言つてしまえば後世の人間が行う身勝手に過ぎない。しかしその身勝手に対しては「歴史観」や「歴史認識」とかの名称が与えられることもあり、もつともらしい範囲での支持を集めると客観的な事実であるかのように思考の枠組みを作り上げてしまう。一八六七年以前と以後を、言い換えれば近世と近代を厳しく峻別するのは、そんな枠組みによつて刷り込まれた観念にすぎず、実は連続する時間の流れとして位置づけられる事象である、と京都府庁と大書され

た正門の文字を前にして、今更ながらの
ように思い至ったわけである。

過去の事象を認識するにあたり、事象
相互の断絶性を強調するか連続性を重ん
じるかは、過去への向き合い方の違いで
あって、それぞれに短所長所がある。断
絶を強く意識する場合は大きな流れを仮
構しやすいが往々にして過去の全否定を
繰り返して独善的な進歩史観に陥ってし
まう。一方、連続性に拘ると過去の意義
を肯定的に評価できるようになる代わり
に歴史のダイナミズムが見えなくなつて
くる。どちらの立場を取るにせよ、それ
ぞれに一長一短がある、というよりは表
と裏のようなものなのかも知れない。だ
とすれば、折衷的な態度が望ましいとい
うことになるところなのだが、そうする
と今度は複眼思考による多角的考察(肯
定的評価)と玉虫色のご都合主義(否定
的評価)のせめぎ合いということになっ
てしまう。ともあれ、歴史認識の問題は
一筋縄では解決を見ない難問であるのは
確かである。

ところで百五十年前が江戸幕府終焉の
年と書いたが、それでは百年前はどうか
だったろうか。二〇一七年からの百年前だ
から一九一七年である。これまた歴史の
教科書でしか知ることのない第一次世界
大戦の真つ最中であり、ロシア革命が起
きてロマノフ王朝が崩壊した年である。
第一次大戦は世界が経験した初めての世
界大戦であり、戦場となったヨーロッパ

では意義も大きく語られる。それに比べ
ると日本での認識はさほど大きなもので
はない。日本が主役の一翼を担った第二
次世界大戦とは扱われ方そのものが異な
っている。ロシア革命に至ってはなおさ
らのことで年表の片隅に書かれている情
報の一つに過ぎない(近年は歴史をモチ
ーフにしたマンガやゲームが多く、ロマ
ノフ王朝の遺児伝説で話題となったアナ
スタシアが注目されることはある)。そう
した意味では、同じキリ番でも百五十年
前ほどのインパクトがあるわけではない
が、百年前にはロマノフ王朝がまだ健在
だったのかと思うだけでも奇妙な感覚は
沸いてくる。なお百年前にロマノフ王朝
を打倒したボルシェビキ勢力が作り上げ
た政治体制はすで歴史の一隅に片付けら
れており、共産党政権下で悪のレッテル
が貼られていたロマノフ家の名誉回復も
司法認定されている。

百五十年、百年と来たからには、続け
て五十年、すなわち一九六七年も取り上
げておきたいところだが、世界史年表を
眺めたところで一九六七年にはこれとい
った大事件は見当たらない。もつとも過
去の事象に対する認識は後世の人間が行
う身勝手に過ぎないと書いたばかりであ
ることを思い出すのなら「大事件は見当
たらない」と言って切り捨てるのも、当
方の身勝手な認識に過ぎない。評価する
人間が変われば第三次中東戦争がクロ
ズアップされるかも知れないし、この年

にその生涯を終えた革命戦士チェ・ゲバ
ラに思いを馳せるかも知れない。あるい
はビートルズがサージェント・ペパー
ズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド
を発表した年であることを取り上げてポ
ピュラー音楽が芸術の領域に踏み込んだ
年との主張が出て不思議ではないし、
はたまたシーランド公国(世界最小の国
家、ただし国連非承認)の建国を忘れて
いるのではないかとニヤつきながら難癖
をつけてくる人がいるかも知れない。こ
のあたりは結局のところ、認識という個
人的な営みになるので捉え方はさまざま
なのだが、どの出来事も江戸幕府の終焉
に匹敵するほどのインパクトがあるよう
には思えない。

話の流れがかなりねじ曲がつてきてい
るのでねじ曲がりついでに余談を一つ。
ナクヨウグイス平安京的な年代暗記の語
呂合わせによれば江戸幕府の終焉は「ヒ
トはムナしい江戸幕府」となるらしいの
だが、空しい繋がりだ。応仁の乱もオマケ
に付けておくのが面白い。応仁の乱の発
端とされる御霊合戦が行われたのが一四
六七年のことで、江戸幕府終焉の年のち
ようど四百年前(したがって現在から数
えると五五〇年前)に当たる。大政奉還
という政治的な策略を「空しい」と言う
のはギャグに近いが、十年に及ぶ混乱と
荒廃の時代が始まった一四六七年の方は
間違いない。「空しい」と言っていない。

編集後記

芥川だより懇親会
五月七日(日) 十二時から
芥川商協会館
会費・二〇〇〇円

参加自由、参加希望の方はご連絡くださ
い。酒と肴を用意します。

昨年は、十六名ほどの参加者があり盛り
上がり二次会も京都でやり飲み疲れまし
た。今回も今、十名ほどの参加希望者があ
ります。

懇親会は毎回、酒の力をかりて各自が思
うところを忌憚なく言いあいながら結
論が出ずじまいに終わるといふ楽しい会
です。ご興味のある方は是非ご参加くださ
い。参加希望者は梵の下村までご連絡を
テーマは「総理大臣になったら是非やり
たいこと」です。想像してくださいね。



心がふあつと自由に

ついに誰に気がねもない一人暮らしというのか…。朝庭に出てメダカを見て、元気やなアと声をかけ、朝刊に一通り目を通す日課。二紙位あると、それぞれ違うとりあげ方があり、とつても面白い。人、人、監視の中で生活してきた半生、一人になってみて、こんなにも楽なのか。誰にも遠慮せず好きな事だけ。

一人には、一人の楽しみがあることを見出せたこと。しゅうと、姑、弟妹、良人、いろんな意味で書き表すことは出来てないけど、今の生活があるのは、この人達からの素敵な贈り物だと思えるようになり、幸せである。

目標とすべきものは、これからの自分の生き方にあるのだから…。経験することでは学べないことが、まだまだこの世にあるから…。

食べられるよつういびを

これから先どうなるの、テレビの画面を見て私は思わず口走った、すぐに返答が。

これまでも増して先が見えにくい現状「男だから、女だからと

思いは同じだよ

確かに、そうだなアと思う。あれこれと心配するより自分の年齢を考え、まず健康でいること。今の生活レベルを落とせないなんてつまらないことを考える要なし。

雑草を食べて生き、野ビル、よもぎも、さつまいものくきも、雑草すべて食べ物。

その中をくぐりぬけ生きてきた道。ぼんやり空をながめ、さわがしい道路に顔をしかめるより、野道をえらび、頭を上げかけている雑草にフトこれは食べれると注意深く眺める元気な姿、自分がここにある。

世代を超えたハンテン

ガタビシと音をたてて開くタンスの引き出し。ヤレヤレ、今日は整理とゆくか。タンスの中身を見てびっくり、なんでこんなものをしてしようのうの匂いがツンと鼻をつく。これだけは。思い出がつもりすぎて捨てられなかった私だった。義父が、初孫になる長男（現在六十二才）を背に一軒しかないおもちゃ屋さんへ。

買ってもらった嬉しさに、背中

からおりるなり、赤胴鈴之助だア

ーと刀を振り回してよろこぶ孫の顔を見て、にんまりとしてほほえむ義父の顔。目の前に浮かんで消えてゆく。

酒を美味しそうに口にする。義父にそっくり、たまに表れる笑顔、すべての動作、そのまま。

へんこつもの、無口、でも親を愛しく思ってくれる気持ちは私には伝わってくる。

この想い出のつまったハンテンは、捨てることは出来ない。白髪の交じった我が息子に、このハンテンはと口に出かかったまま、又タンスの中へ。きつと義父もあの世で、赤胴鈴之助やなアと笑っているだろう。

俳句

土田 裕

啓蟄や杭打ち響く被災の地

花粉症我は無縁と思ひしに

あたたかや妻は車中で舟を漕ぎ

白蓮の花より小さき鳥の来て

床の間で盛りを終へる椿かな

影山 武司

草餅の餡はみ出せり翁面
出窓から猫の見てをり白木蓮
野良猫に誘はれ出でし木の芽風
山吹や一重も八重も色ひとつ
寒戻る空の奥より降るごとく
春の土の匂い入り来る朝の雨
大空に切り込み入るる初つばめ
電車の朝走る水際の風光る
日差し降る臉の裏の春の闇
柏手の背中に揺るる糸桜
すべらせて髪をすく指花ミモザ
満開の影まで白き雪柳
轉りに鉄合はする庭手入